

Fate/Hentai Order

「旗戦士」

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界を、人類を救う願いは、一人の変態に託された。

目次

第一節：	変態、冬木に立つ	1
第二節：	息子は息子でも違う意味の息子	11
第三節：	ああ無常、変態紳士	20
第四節：	私の安珍様がこんなに変態なわけがない	26
第五節：	ヴィヴ・ラ・フランスは魔法の言葉	33
第六節：	マリーに踏まれたい	39
第七節：	あのおっぱいで聖女は無理がある	43
第八節：	秘技！ マスターがブロークンファンタズム	50
第九節：	性別はアストルフオ	54
第十節：	俺の股間はエクスカリバー	60
第十一節：	深夜ポテチと深夜ラーメンは肥満の基	67
第十二節：	覗きは男の勲章	73
第十三節：	造形は美少女フィギュア	77
第十四節：	自立飛行物体グダオ	82
第十五節：	個人的には悪魔っ娘が好き	87

第一節： 変態、冬木に立つ

<カルデア>

日本。

世界有数の経済大国として名を馳せるこの国には、ある文化が根付いていた。

それは魔術。遠坂、間桐、そしてアインツベルンの御三家が集結するこの国では、“聖杯戦争”というものが行われていた。2015年、人理継続保証機関“カルデア”によって収集された多くの魔術師がいた。理由は2016年に起こる大崩壊に向けて、魔術師の力を結束し回避をしようというもの。そして、僕も呼び出されたその一人だった。

「僕はこの数年間、エロエロな女性サーヴァントを召喚して童貞卒業をするという試みをしてきた。晴れてカルデアにもマスター候補として呼ばれ、ウキウキしてた矢先になんかカルデアの機械が暴走して昔の冬木市に行くことになってしまった」

「先輩、何ブツブツ言ってるんですか」

「マシユのマシユマロおっぱいを食べたいと言ってたんだよ。だからその盾で後頭部殴るのは止めて？」

「盾の先で突いた方がいいですかね、フォウさん」

「フォウ、フォウフォ（どてっ腹はいけねえ。脾臓だ脾臓）」

「なんかクツソ物騒な事言ってるない？」

とりあえず冬木市に降り立ったはいいいけど辺り一面焼け野原過ぎてぶったまげた。初心者マスターに課す仕事じゃないし、いきなり超展開過ぎないだろうか。僕を励ますように、青いフードを被った男性サーヴァント、クーフリーンが僕の肩を叩いた。

「まあそんな辛気臭い顔すんなよ、坊主。俺が必ず家に連れて帰ってやっから」

「ありがとうキャスニキ……。でも僕兄貴より兄貴の師匠に会いたくないよね」

「師匠にいい？ やめとけ、おっかねえぞ」

「性的な意味でおつかないおっぱいしてる筈だから」
「絶対会わせたくねえ」

閑話休題。焼け野原の間を駆けていると、突然僕の頭に男性の音が響いてくる。この声の主はカルデアで医療顧問を務めるロマニ・アーキマン、通称ドクターロマンという青年であった。

『やあ、ぐだ男くん。そっちはどうだい？』

「いきなりクライマックスな場所に来させないでくださいよ。どう見てもこれラストダンジョンレベルの崩壊っぷりじゃないですかコレ」
『ごめんごめん。マシユの方はどうかな？』

「異常な……すいません、今見つけました。私の胸を揉んでるマスターです」

「揉んでるんじゃない、揉みしだいているんだ」

「ブチ殺すぞクソ先輩」

「さんを付けるよデコ助後輩！」

マシユからの一撃が最近気持ち良く感じれてきた。僕もそろそろあつちの領域まで達せそうかもしれない。そんなこんなで僕達三人は比較的安全な場所で野営をする事になり、火の手が回っていない公園でテントを広げた。

「なあマスターよお、そろそろ英霊召喚でもしてみたらどうだ？ 戦

力増強の為に、必要だと俺は思うがな」

「そうだね……。ちょうど手元に虹色の綺麗な石が6つもある。一個ケツに入れてみたけど、ちょうど良い感じにフィットした」

「お前化物？」

サーヴァントに化物と言われましても……。困惑したまま僕は先程設置した携帯用召喚陣を展開し、3つの聖晶石をその中へ投げ込む。即座に召喚陣が起動し、六つの光球が円を作り出した。しばらくして光の柱が陣の中心に現れ、その奥から背丈の高い男性が現れる。「おやおや、これはこれは奇遇ですな。デユフフフフ。黒髭、参上ですぞ。緑は敵ですぞ」

「なんだよこの黒ひげムックはっ!? しかもなんか聞いた事ある口調してるし！」

「お、辛辣ウー！ でもマスターからは何故か気の合う感じがしますぞい」

「僕は巨乳のお姉さんか可愛い貧乳ロリっ子を召喚したかったんだ!! 畜生っ！ これが人間のやることかよおっ!!」

地面に膝を着き、拳を叩きつける僕。無論の事マシユから養豚場の豚を見るような悲し気な視線を浴び、黒髭ことエドワード・ティーチは優しく僕の肩を叩いた。

「大丈夫でござるよ……。まずはこの本を読むべし」

「なにこれ？ ………………ねえ、ティーチって言ったよね……」

「そうですぞ。さて、感想をお聞き願えるかな？」

「今すぐメデューサさんを召喚したくなつた」

「ごめんなさい、クーパーリンさん。今すぐ先輩を殴らないと止まらない気がするんです」

「嬢ちゃん、流石に盾の先で突き刺すのはNGだと思うぞ」

マシユの明確な殺意を感じ取る。これが漆黒の意思というやつか……。気を取り直してもう一度僕は召喚陣を起動し、聖晶石を投げ込んだ。

「サーヴァント・アーチャー、エミヤ。召喚に応じ参上した」

「また男かよおおおおお!!」

「まあまあ。ここに眼鏡後輩ドスケベ系ヒロインがいるじゃないですかぐた男氏ー。あとマシユ氏は盾で突くのやめてほちい」

「止めるなあああああ!!」

「ちよつとタンマ！ マジで座に還るから!!」

黒髭がマシユにボコボコにされているのは気にしない。なんか今後よく見る風景になりそうだしね。おもむろに僕は召喚できるサーヴァントの一覧を見ると、黒髭が聖晶石から召喚されるサーヴァントではないらしい。隣に立っていたアーチャーの視線が僕を憐れむようなものに変わっていることは気にしない。

「ようアーチャー。男だらけのところに召喚されちまったな」

「構わないさ。むしろ女性だらけのところに召喚されたら私は死ぬ」

「あー……それは言ってる」

なんだこのリア充の会話は。黒髭なんてマシユに盾で殴られすぎて顔の原型が留めていないのに……。僕は霊基が消えかけているティーチに肩を貸し、魔術による応急処置を施した。マシユももう少し手加減してあげたらいいのに……。

「大丈夫か同志ティーチ。このイケメン共は放っておいて僕たちでこのオーダーをクリアしてしまおう」

「そうですね……。でも拙者、マシユ氏に殴られてかなり悦に入ってたでござる」

「テメエこの野郎！ 召喚されて早々ご褒美貰ってんじゃねえ！」

「童貞には出来ない所業ですぞ」

僕はティーチに自害を命じた。

――――
＜特異点F・最終地点＞

ティーチが令呪に対してすさまじい耐性を見せるのでとりあえず助走をつけて殴り、僕らは地下洞窟を抜けて聖杯のある場所へたどり着く。僕らに課されたオーダーは特異点の中に悪用された聖杯を取り戻し、歴史を元ある形に修正すること。その道中、女性のサーヴァントが敵対してきたが僕とティーチによる超絶技巧セクハラアタックでどうにか撃退することができた。

「遂にたどり着いたね……。苦しくも悲しい戦いだった」

「敵対したサーヴァントが漏れなく憎しみに満ち溢れた顔で座に還っていったがな……」

「うるせえぞエロゲ主人公！ 童貞の気持ち貴様らに分かるのか！！」

「いや、女は自分で惚れさせるものだろ……」

イケメンの正論により僕の戦意は喪失される。そんなことができたら僕は今頃マシユをイチチャイチャしてる頃なんだよ!!!

「先輩、今変なこと考えてませんか？」

「マシユのタイツを被って香りを楽しみたい」

「あ、分かるー。足のところが臭かったらなお良し」

「止せ嬢ちゃん!! 今こいつを殺したら俺らいなくなっちゃうぞ!!」

「段々黒髭の言っていた事がわかってきたかもしれない。頭から大量の血液が流れ、僕の顔は血塗れたものとなりこの場にいた全員表情が青ざめる。まあこの程度僕にとっては全然問題ないので無視して先に進むことにしよう。」

「……マスター、構えろ。何か気配を感じる」

「そうだねアーチャー。僕も美少女の波動を感じるよ」

「いやそうじゃないんだが」

崩壊した冬木市の奥にあったのは巨大なクレーター。既に周囲に都市のような影は無く、まるで地球ではない所に来たような雰囲気僕たち全員の空気が張り詰める。そしてその先に立っていたのは、黒く禍々しい甲冑を身に纏った金髪の少女だった。

「見てアーチャー！ 僕の予想当たった！ 絶対あの娘ア○ル弱いよ！」

「やめろ！ 彼女のア○ルは普通だ！」

「お前なんで知ってんだよ」

「あつ」

あとでアーチャーは殴る。そうしないと気が済まない。黒騎士の美少女はすごく微妙な表情を浮かべながら手にしていた両刃剣を構える。でもなんだかあの目線は興奮するな。

「……………えーと、あの。そろそろいいか」

「あ、ごめんね女騎士さん。あとでこの赤い服を着た男が土下座するんで」

「なんでさ！」

アーチャーの隣に黒髭が立ちふさがり、彼の肩を掴んだ。

「うるさいでござる！ 御用改めろクソエロゲ主人公！」

「待て待て！ 仲間割れしている場合か！ マシユ、ランサー！ 助けてくれ！」

「エミヤさん最低です」

「お前そういう奴だったかー、ないわー」

膝を地面に着いて落ち込むアーチャーを見て、正直な話僕は彼が可

哀そうに思えてしまう。あとでアーチャーにはごく普通の主人公が魔法の戦いに巻き込まれてハーレムを形成するエロゲを渡そう。

気を取り直して黒騎士と対面すると僕はまずキャスターの兄貴の攻撃力を魔法によって上げ、僕は黒髭と彼に攻撃の指示を送った。

「アンサス！」

「ぐっ……！ やるな……！」

「隙有りですぞ〜」

さすが黒髭、自身の変態性も相まって黒騎士——セイバー・オルタと死闘を繰り広げている。落ち込んでいるアーチャーを励まし、なんとか戦闘に参加させたが、この後彼に更なる悲劇が襲った。

「貴様らが仲間を率いるのなら、こちらも召喚するまで。出でよ！」

セイバー・オルタがそう言い放った瞬間、巨大な弓を携えた黒い髪のツインテールの少女と、黒いチューブトップを纏った紫の長髪の女性が現れる。そしてエミヤの顔が真剣なものから引き攣ったものへと変わり、僕は彼の顔を見上げた。

「なっ……」

「見ろよアーチャー！ またア○ル弱そうな女の人が出てきたぞ！」

「止せ！ 彼女たちの穴は硬い！」

「だからなんで知ってんだよ」

「ああああああ!! しまったああああああ!!」

もう完全にコイツは戦力外通告だ。そうしないと僕の気が収まらない。でもあの子たちが下の方で緩いというギャップを知ったので正直僕の息子も収まっていない。

「先輩！ こんな時に何やってるんですか！」

「ごめんマシユ！ でも文句はアーチャーに言ってくれ！ 行くぞ黒髭！ 今こそ僕たちの友情コンボを見せつける時だ！」

「任された！ 行くでありますぞマスター！」

そう言うのと黒髭は僕の両脚を掴んで持ち上げ、肩車の要領で僕の身体を構える。いきり立ったマイサンがこいつの後頭部に当たっているのが非常に不快だが、この状況ではどうとも言ってられない。

「えっちよっ何それ」

「さあ行くぞ！ 美少女たち！ 僕の流星一条を食らえいい！！」

先ほどの威厳はどこへやら、素で引いた反応を見せるセイバー・オルタ。少し寂しい部分もあるが、僕の身体は黒髭によって投擲させられる。

股間部分から急激な魔力爆発を発し、セイバー・オルタを除いた2人のサーヴァントは消滅した。

傷ついた彼女だけが残り、僕は膝を着く彼女の前に立ちはだかる。

「立てるかい？ セイバー？」

「私は敵だぞ……そんな奴に手を差し伸べるなどってきやあああ！！
なんで裸なんだ!!？」

何を隠そう、今の僕は流星一条により着ていた魔術礼装が吹き飛び生まれたままの姿となっていた。だがやけに清々しいのは何だろう。「いや待て！ この景色を最後に座には還りたくない！ あっ待ってちよっ——」

「……決まったな」

「嬢ちゃん……」

「何も言わないでください。今からこの人と一緒に人理を救うんですから」

もう一度言うが僕は全裸である。要はケツ丸出しでこの戦いを乗り切ったわけだ。他のサーヴァントたちから向けられる視線がやけに突き刺さるが、僕は気にしない。というか黒髭はいい笑顔してやがる。

そんなこんなで僕は全裸の状態からキャスターの魔法によって股間だけ隠され、聖杯が設置されたとされる場所へと向かう。

「やあ、諸君。よく来たなってなんで一人半裸なんだ」

「レフ教授！ 生きてたんですね！」

「いやそうだけど今自分の状況を見てみような？ 半裸だぞ？ はっば隊と同じだぞ」

人生葉っぱ隊とは言い得て妙である。話を聞くにこのレフ・ライノール教授が2016年以降の人理を破壊した張本人らしく、黒幕つ

ぼい感じで待っていたら半裸の僕が立っていた、という事になるらしい。

まあ申し訳ないけどこれが僕のスタイルなんだよね。

「貴様……なぜこんなことを！」

「あつ、そこは普通にするんだ……。ふ、フハハハハハ！ 人類というのは等しく愚かなものだ。それを見ている神は——破壊するしかあるまい？」

「じゃあここにあるレフ教授秘密の日記を……」

「どこから持ち出してきた!! つてかやりづれえなオイ!!」

やけに嚴重に仕舞われていたのでこっさり持ち出してきました。早速開いてみるとそこにはまあひどい内容が書かれている。マシユのスリーサイズの成長過程だの、自分好みの性格にしただの……。

「何が書かれてるんですか？ 見せてください先輩」

「……うん、これはマシユが見ちゃいけないものだね」

「えっなんでですか？ 気になるんですけど」

「どわーっ!! 手が滑って日記が燃やしてしまったああ!!」

迫真とも呼べる演技で日記を燃やすレフ教授。マシユ、この世には知らなくてもいい事実があるんだ。それを守っただけ僕もえらいと思う。

「くそう！ ここは一時撤退だ！ 覚えておけよ貴様らー!!」

「物凄く3流な捨て台詞を残して消えたでござるな」

聖杯も手にし、この空間を保っていた魔力が崩壊し始めたのか周囲のクレーターから地割れが起こった。その時、通信が遮断されていたロマンからの声が聞こえ、僕はそれに応答する。

『ぐだおくん！ マシユ！ みんな！ ようやく通信がつながったよ、今すぐそこから脱出してくれ!』

「言われなくてもしてやりますぜ！ 早く転送してえええ!!」

『飛べよおおおお!!』

〈カルデア・転送ターミナル〉

冬木での戦いを経て、僕たちはようやく元の場所へと帰ってきた。転送された先には人理焼却から生き残ったカルデアのスタッフたちとロマン、それにダヴィンチちゃんや僕らが迎える。

「ぐ、ぐだおくん!? なんで裸なの!? 早く服着てよ! 女の子もいるんだから!」

「死闘の末にこうなりました。な、黒髭」

「ですぞですぞ。というか拙者たちもここに来ちゃったんでありますな」

どうやら一度召喚を行ったサーヴァントは僕に仕える者としてカルデア스에記録されているらしく、先ほど泣きそうになっていたエミヤと共に戦ってくれたキャスターの兄貴もこの場に立っていた。ダヴィンチちゃんから替えの服を渡されて腕を通すと、再び布に僕の身体が抑えつけられる。

「ひとまずお疲れ様、みんな。後の処理は僕たちがやっておくから、みんなは休んでいてくれ。今回召喚されたサーヴァントたちは部屋に案内するよ」

「……助かる。今は一人になりたい」

「あとで酒でも飲もうぜ、アーチャー」

ようやく得る事のできた安心感に僕の身体は疲労を覚え、一気に倦怠感が僕を襲う。マシユに身体を支えられながら部屋まで歩くと、彼女が何か気づいたらしい。

「先輩、そういえば所長はどうしたんです?」

「……………あつ」

<時空の狭間>

「どこなのよ〜!! っここは〜!!?」

白一色の空間に、閉じ込められる少女が一人。美しい銀髪を携え、黒とオレンジのブレザーを羽織った彼女の名は、オルガマリー・アムニスフィアと言った。

突然起こったカルデアスの暴走により施設が崩壊し、彼女もその爆発に巻き込まれて死亡した……はずだったのだが、何故かオルガマ

リーはこの白い区画に身体を落ち着けている。

「えっちよつマジで!? 本当なら私あのマスター候補とマシユと一緒に冬木にいるはずじゃない!! なんで存在忘れられてんの!? 冗談じゃないわよ! 出さないよ! サーヴァント化してもいいから出さないよ!」

彼女は地面にへなへなと座り込んだ。

「うわっくん!! 助けてよ! ロマニ、レフ、みんなあゝ!!」

第二節： 息子は息子でも違う意味の息子

<カルデア・自室>

初めての歴史修正によって無意識のうちに身体が疲労を感じていたのか、自分の部屋に入るなり僕は即座にベッドへ寝転んだ。白い壁に囲まれた無骨な部屋に転がっているダンボール箱の数々へ視線を向け、溜息を吐きながらガムテープの封を切る。

「……あ、これ確か持ってきたエロゲだ……」

瞬間僕の全身に張り巡らされた魔術回路が動き出すのを感じ、そしてそれは下半身に集中している。

——息子よ。君は今、白日の下にその体を晒したいんだね。

——はい。父さん。

まあこんな脳内会話をこなしながら僕は足元にある段ボール箱から銀色のノートパソコンとエロゲソフトの入ったパツケージを机に置き、自分の手元に数枚のティッシュペーパーを置く。これを見ている日本男児諸君ならもうお分かりだろうが、僕はこれから息子との対話を始めようとしていた。

「既に任務を終え、僕は部屋に一人きり……ならばやる事は一つ！
出るおとおおお!! マイサアアアアアアン!!」

某機動武闘伝のニュアンスで僕はいつでも息子が仕舞いやすい寝間着に着替え、いよいよPCの電源を点ける。久方ぶりの対話に胸を躍らせながらソフトをパソコンのディスクドライブに入れてから読み込ませると、いよいよゲームは起動する。

その時だった。部屋の玄関から扉の開く音が聞こえ、僕の部屋には似つかないいい匂いが鼻を突きさす。

瞬時にその方向へ視線を向けると、灰色のパーカーを羽織った僕の後輩ことマシユ・キリエライトが入ってきたようだ。

「先輩？ 何してるんですか？」

「……少し、調べものをね」

表示されているのはエロゲのウィンドウである。断じて調べものとかいう高尚なものじゃない。

「なんの調べものですか？ もし宜しければ私もお手伝いします」

「英霊たちの歴史を調べようと思つてね。ありがとう、気持ちだけで十分だよマシユ。でもこれは僕一人でやりたいんだ」

もう一度言う。決して英霊たちの歴史なんてすぐ頭の良いものじゃない。むしろ本能剥き出しの物品である。

「……さつきからなんでパソコンの画面を隠してるんですか？ 何かやましい事でもあるんですか先輩」

「そ、そそそそんな事あるわけないじゃないか!! ほらもう夜遅いよ？ 明日もトレーニングあるんでしょ？ 早く寝ないと」

「あつ……もう。せつかく真面目にしてると思つたら……むう」

口が裂けてもマシユに似たキャラのエロゲとは言えない。とか言つたらあの盾の錆びになつてしまう。僕はマシユの身体を無理やり部屋から押し出し、机へと戻る。

「……………ほほう、これが現代のエロゲでござるな」

「ぎやあああつ!! テメエ黒髭!! どこから沸きやがった!!」

「いやだつて拙者サーヴァントだから霊体化できるし。隣にクローフィリン殿もいますぞ」

「坊主、俺は別に人の趣味にとやかく言うつもりはねえが……。その、流石にリアルの知り合いに似ているのはやばくねえか？」

「うるさい！ そっちの方がシコリテイ高いの知らないだろ!!」

もう僕のプライバシーガバガバじゃないか。これにエミヤまでいたら僕は終わりだったが、少なくとも2人にしかバレていない。まだ慌てるような時間じゃないと落ち着かせ、僕はエロゲのウィンドウを閉じた。

「ほんでどうしたのよ、二人そろつて僕のところに来るなんて。夜這いはNGだよ」

「拙者そっちの気はないから。ノンケだから」

「俺がホモみてえな言い方すんなヒゲ」

「実際兄貴の方がエミヤとのカップリング多——」

「それ以上言つたら燃やす」

無造作に置かれたエロゲへ杖を向けて火の玉を具現化させる兄貴。

男女ともにモテるっていう事は僕良い事だと思っんだ。だからその杖を降ろしてほしい。

「まあマスターとの親睦を深めようと思っまして、拙者ゲーム持っってきたでござるよ」

「なんのゲーム？ 場合によっちやリアルファイト起こるのはだめだからね」

「たけしの風雲城でござる」

「チョイス古ッ」

「ファミリートレーナーも二人分用意してある。これで遊ぼうぜ坊主」

またなんでこんな鬼畜難易度のゲームを選んできたのかは定かではないが、僕は段ボール箱から大きい目のモニターを引っ張り出してファミコンとファミリートレーナーを繋ぐ。

「おお！ 拙者ゲームを体験するのは初めてでありますからなあ、結構楽しみですぞ」

「現界してた時は何度かやったことはあるが……俺もこうして何人かでやるのは初めてだな」

確かに、こうして誰かと集まってゲームをするのはカルデアに招集される前の高校生の時以来だ。だが一つ文句を言うとならば遊ぶメンバーが二人とも滅茶苦茶ぐっつい男だという事である。

「……この場にいる人間が女の子だったなら……どれだけ、どれだけ……ううっ」

「まあまあ元気出せよ。いつか女のサーヴァントも召喚できるって、な？」

「だったら兄貴の師匠呼んでよ」

「別に会わせてもいいけど確実にドン引きされる気がする」

ケルト人ドン引きさせるとか僕はどんだけ酷い人間なの？ ただ欲望に満ち溢れてるだけだよ？

「おっ始まりましたぞ。ささ、マスターも早くこのマットの上に立って」

「はいはい……」

どうやらこのゲームは三つの城という名目で分けられているらしく、最後のボスまで辿り着くにはこの三つのステージをクリアしなければいけない。

そんなこんなで僕はスタートの項目を押すのだが、これが想像以上に体力を削られる。マットの上で走ったり、飛んだり、はたまた足を交差させたりと僕みたいなキモオタにはしんどい運動ばかりだ。

「い、意外と動くんだなこれ……暑いわ」

「きやあつ！ 兄貴のエッチ！ いきなり脱ぐなんてデリカシーのかけらもないわ！」

「心底キモい」

「辛辣」

悪ノリすると罵倒されるのがキモオタの基本である。この調子で遊んでいるとそろそろ体力も限界だ。息切れが半端なくなってきた上に何故か動悸もすごい。隣で上半身裸で動いている黒髭へ無意識に身体が傾き、僕たちはそのまま地面に倒れる。

「ぐああああ!! マスター!! なぜピンポイントに拙者の上に乗ってるんですかあ!？」

「いやちよっ……死ぬ……黒髭の男くさい匂いと息切れで死ぬ……」

「坊主!? 絵面的に不味い位置に顔がいつてるぞ!？」

ほぼ深夜に騒いでいるので僕らの声が周囲にも漏れているのか、急に部屋のドアが開いた。どうやら危険を察知して助けに来てくれたロマンとダヴィンチちゃん、マシユがやって来たようでバタバタと足音が聞こえる。

ああ……この状況はヤバいと僕の息子と本能が告げている……。

「ぐだ男くん!? 大丈夫——えっ」

「……………おやおや」

「せ、先輩…………？」

「あつ、こ、これは違うんだ三人とも」

黒髭の身体の上に倒れた状態で僕はやって来た3人と鉢合わせた。三人の目にはきつと僕が無理やり黒髭とそういう雰囲気になっている、所謂僕×黒髭の状態が写っていることだろう。

「……………ロマニ、そつとおいてやろう」

「う、うん……………そうだね。世界は広いね」

「……………そうですか。先輩はそういう人だったんですね」

「違うから！ 僕女の子好きだから！」

汚物を見るかのような視線が僕に浴びせられる。マシユに至っては大切にしてきた虫の標本をパクられた某文学のキャラみたいなお顔つきになっていた。いくら変態紳士と言えどこの視線はきつい。

「行こう……………邪魔しちゃったね、ぐだ男くん」

「待ってってば！ 誤解してるって！ いやちよつ、待ってエエエエエエ!!？」

――――
〈カルデア・転送ターミナル〉

翌日。

僕はどうにかして誤解を解こうと3人をかき集め、傍にいたクーフリーンの兄貴にも弁解して貰ってどうにか事なきを得たが何か大切なものを失った気がする。

今回僕がこの場にいるのは既に最初の特異点……………歴史修正のポイントをカルデアのスタッフが見つけ出したのでその説明を、という事らしい。

「やあホ……………ぐだ男くん。おはよう」

「今ホモって言いかけただろコラ」

「そ、そんな事ないよ！ 決して僕は君がそっちの気があるだなんて……………」

「確信犯じゃねーか！ 何度も言うけど僕は女の子が好きなんだって……………」

状況を知らない女性カルデアのスタッフからは豚を見るような目で、男性スタッフからはドン引かれた視線を浴びせられる。僕の幸せキヤツキヤウフフカルデアライフはもう既に終わったのかもしれない。

「エミヤからも何とか言ってくれよ！」

「……………いやその、信用はしている」

「ケツ押さえながら言える台詞じゃねーだろそれ！」

あとでエミヤのベッドにはクーフリーンの兄貴とエミヤがそれらしいことをしている本を隠しておく。気を取り直してロマンが咳払いをすると、騒然としていたターミナルは一瞬にして静かになった。「今回集まってもらったのは次の特異点……オルレアンの話だ。聞いたの通り、場所はフランスのオルレアンで、時代設定は1431年、ちやうど百年戦争の休止期間になる」

百年戦争と言えば……確かオルレアンの乙女と名高いジャンヌ・ダルクが死んでしまった時代か。世界史の授業で何度か耳にしたぐらいだが、こう実際にその時代へ飛ぶとなるとまた緊張感も違ってくる。

「どういった状況がこの特異点で続いているのか分からないけど、観測機のデータから分かったことはジャンヌ・ダルクが”まだ生きている”という事。つまり、聖杯の干渉がこの時代にはあるんだ」

「という事はジャンヌ・ダルクに会えるっていう事……？」

「十中八九、そういう事になるだろうね。でもどんな敵の勢力がいるのかはまだ判明していない。そこで君たちには、ここの調査を行ってほしい」

真面目な声音に思わず僕は息を呑む。こんな現代クソもやしキモオタが歴史上の超有名人と協力して歴史を修正するだなんて思いもよらなかった。そんな不安げな僕を見て心配に思ったのか、隣に立っていたエミヤが僕の肩を叩く。

「そんなに気負う事はない、マスター。君は私たちと契約した人間だ。こういう時はもつと胸を張るといい」

「アーチャーの言う通りだね。それに、今回は戦力を増強しようと思ってるから、ぐだおくんが心配することはないよ。以上が作戦の概要だね」

持っていた紙束を下ろし、彼は周囲を見回し始めた。一つ気になったことがあるので僕は手を挙げると、少し戸惑いながらもロマンは僕を指す。

「ロマン、一つ質問があるんだ」

「ん？ なんだい？」

「ジャンヌ・ダルクってマジで処女なの？」

僕はマシユに殴られた。

＜カルデア・召喚部屋＞

既にマシユの盾によってボコボコにされた顔を押しさえながら僕は30個の聖晶石を手にこの召喚部屋へと来ている。この聖晶石というのはサーヴァントを使役する際に消費するカルデアの魔力を具現化したもので、綺麗な七色の光を放っていた。隣にはその様子を見守る（監視する）役目のマシユと黒髭がその様子を見守っている。

「やっぱりさ、こういうのは形から入るのが大切だと思うんだよね」

「と、言うത്？」

「とりあえず服を脱ぎます」

「待てやコラ」

ズボンのベルトに手を掛けた時点でマシユの黄金の右ストレートが突き刺さった。最近キレが増してきているのは気のせいではないのだろう。気を取り直して僕は革製の穴あきグローブを両手に詰め、指の間に聖晶石を挟む。

「さあ来たまえ！ 僕の可愛い可愛い女の子サーヴァン

トオオオオオオ!!!」

「ほんとブレねえなコイツ」

「正直拙者でも心配になってきましたぞ」

余計なお世話じゃ、特に黒髭。9つの光球が回転し始め、それらは次第にカードの形を模っていく。カードからは長い紫色の髪を背後で束ね、和風の青い羽織りを纏った美形の男が現れた。

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。ここに参上——」

「また男だああああ!! うわああああああ!!」

「……………えーと」

なんとも微妙な表情を浮かべる色男こと、佐々木小次郎。歴史の偉人に全力で喧嘩を売っているのは百も承知だ。

「すいません小次郎さん。ちよつとこの人おかしくて」

「い、いや。此度のマスターはちゃんと人間で良かったと某も安心よ。何はともあれ、よろしく頼むぞ。主殿」

「う、うん……よろしく小次郎……」

「マスター、まだ召喚は始まったばかりですぞ。ほらしつかりする」
黒髭に倒れた身体を抱えあげられながら、僕は再び召喚陣と対面する。空気を読んで召喚されるスピードも遅くなっており、僕が前に立つと再び起動した。

「あつ！ 先輩！ 今度は金色のカードが出ましたよ！」

「金色お!? も、もしかして本当に女の子か!?!」

金色のカードから姿を現したのは、白い甲冑と黒いミニスカートを穿いた紛れもない女の子だった。三つ編みのピンク髪が揺れ、彼女は笑顔を見せながら僕の前に降り立つ。

「やつほー！ ボクの名前はアストルフオ！ クラスはライダー！
それからそれから……ええと、よろしく！」

「あ……あ……」

「あ、あれあれ？ どうしたのマスター？ そんな呆けた顔して？
もしかしてボクの可愛さに見惚れてた？」

見惚れてたも何も、すらつと伸びた白くて細い太ももに視線は釘付けだ。しかも僕っ娘とかストライクゾーンまっしぐらである。

「なんだか、某の時よりもはるかに反応が違うでござるな……」

「大丈夫ですぞ小次郎氏。拙者の時もそうでした」

「本当にすいません……。あのアホが……」

なんか勝手に評価が下げられてるけど僕は気にしないぞ。さつそく僕はやって来たアストルフオちゃんの感触を確かめようと彼女を胸に抱き寄せる。

「う、うわあつ！ 急に何するのさ！」

「君は記念すべき初めての女の子サーヴァントだ……こんなにうれしいことは無い……」

「え？ もしかしてマスター、何か勘違いしてない？」

本能的に嫌な予感を察知する僕の身体。う、うっそだあ！ こんなに可愛い女の子が男の子なわけないやい！ さては僕を出し抜こう

としてるんだア！ 可愛いやつめ！

「ボク男だよ。ここ触ってみて」

「そ、そんな大胆な——えっ」

僕の手を感じるのには確かに自分のモノと同じ感触。自分の息子に
触れてからもう一度アストルフオちゃん、否。アストルフオくんの股
間に触れる。

「嘘だあああああああああ!!!!」

その後の事はよく覚えていない。絶叫と共に何故か僕の服は弾け
飛び、マシユに気絶させられたのはまた別の話。

第三節： ああ無常、変態紳士

<フランス・平原>

「毎度の事ながらどうしてレイシフトする時に場所が安定しないんだろうね」

「きゃあああ!! 先輩!! 先輩の頭が地面に突き刺さっています!!」

とてつもない磁場と魔力行使を経て、僕らは無事にフランスの地を踏めることに成功した。まあ頭が突き刺さって普通の人間だと全然無事じゃないんだけど、そこはまあ僕なので問題ない。

既に顔がボロボロなのはさておき、先ほど召喚したサーヴァントたちをこの地に呼び寄せた。今回の編成はアストルフォ、小次郎、エミヤのパーティーでこの特異点を攻略する。

「すごい! マスターって不思議な体してるんだね! 今度調べさせてよ!」

「いいよアストルフォきゅん。特にこの股間を入念に調べてほしいかな」

「んー、それはまた今度!」

最近男の娘もイケるようになってきたのでアストルフォきゅんはアウトよりむしろストライクゾーンへと寄っていた。レイシフト開始数秒でマシユの目が死んできているが、決して僕のせいだとは思いたくない。

「む、マスター。あそこに鎧の兵士たちがいるぞ。おそらくはどこかの部隊だろう」

「じゃあじゃんけんで負けた人があの人たちに全裸で突撃するってのはどう?」

「ふふ、乗ったぞその勝負。何やら面白そうだ」

「ボクもやるー!」

案外小次郎もアストルフォきゅんもノリが良い。マシユとエミヤは参加しないそうなのでとりあえず3人でジャンケンをする事に。

「まあこうなる事は分かってたよね。じゃあ行ってくるよ」

「マシユ。君は目を閉じていた方がいい」

「大丈夫です。フオウさんが私の視界を守ってくれています。ああ……しゅごいモフモフ……しあわせ……」

「君もなんだか問題ありなんだが」

そんな二人を一瞥し、僕は生まれたままの姿で鎧の兵士たちに近づいた。これぞ究極の投降スタイルだ、まさにネイキッドぐだ男とは言い得て妙である。

「やあ兵士さんたち。僕はぐだ男。この通り武器は何も持ってないし危険な感じもしない。信用してくれ」

「へ、変態だ！ 変態がいるぞおーツ!! 敵襲！ 敵襲ーツ!!」

「そ、そんな馬鹿な！ 究極の無武装スタイルだぞ!!」

「やはり……何か兵士たちの様子がおかしいでござるな……」

「おかしいのは先輩たちですからね!! むしろあの兵士さんたちはまともですからね!!」

続々と剣を抜く人たちに僕は啞然とする。しかしこのままでは僕は殺されてしまうだろう、ならばやる事は一つ！

「そちらが剣を抜くのなら僕もこの妖刀を抜くまで！ さあ覚悟しろ！」

「……まだ抜けてないな……」

よし決めた。この兵士たちは殺す。こいつのあられもない姿を写真で撮って全世界に拡散してやる。そんな僕を援護するかのよう、背後にいた小次郎たちが僕を守るようにして部隊の前に立ちふさがった。

『やつほー、手が空いたから様子を……ってなんで周りを武装集団に囲まれてるんだい!』

「全裸で近づいたらこうなった」

『んなの当たり前だろ馬鹿！ もう少し考えろ!』

普段の優しい口調はどこへやら、罵倒の数々が通信機を通して聞こえる。そんなこんなで僕たちは戦闘態勢に入り、兵士たちと対峙したマシユたちの一番後ろへ僕は移動した。

「エミヤ！ まず前線に立っている剣士を倒してくれ！ アストル

「フオは彼の援護、小次郎は弓兵へ遊撃だ！」

「いいだろう」

「ようし！ 任せて！」

「心得た」

白と黒の双剣で剣を持った兵士と渡り合うエミヤとアストルフオを横目に、小次郎が二人を狙っていた弓の兵士へと急速に接近していく。さすが稀代の剣豪と呼ばれただけはあるようで、瞬く間に小次郎の刀が放たれた弓を斬り落としていった。

「な、なんだこいつらは……！ あの変態といい剣士といい化け物じみてやがる！」

「撤退だー！ 退け、退けーっ！」

「あつ待てコラア！ 僕のマイサンを侮辱した罪はデカいぞオ!!」

「怒るところそっちなんですか!!? というか完全に自業自得ですよね!!」

「ごめんマシユ、僕の頭の中に自業自得なんて言葉は無いんだ。服を着てボタンを留めずに乳首を晒していると、妖艶な笑みを浮かべながらアストルフオが近づいてくる。」

「もう、マスターってば。ボタン留めないと風邪引いちやうよ？ それとも……ボクに留めてほしいの？」

「ぐへへへっ、フヒヒヒッ。アストルフオきゅん……」

「なあに？ マスター？ なんか笑い方が変だよ？」

もう僕はアストルフオきゅんだけで生きていけるかもしれない。彼女……否、彼の蕩けるようなボイスに僕の脳内は既に侵されている。もう性別：アストルフオでいいんじゃないかな。

この時代の人間と接触を図る為、とりあえず僕たちは逃げていった兵士たちの後を追う事に。周囲に町の様子や手がかりも見つからないせいいか、頼みの綱は彼らとなつた。

「これは……なんて酷い状態に……」

「ほんとだねー……。外壁こそ無事だけど……」

『ここから見ると中はボロボロだ。砦とは呼べないぞ』

ロマニの説明によれば、今僕らがいる年は1431年。百年戦争が

休止中の年なのに、この負傷兵の数は異常だ。多くの屈強な兵士たちが着ていた鎧から血を流し、傷の痛みには呻き声を上げている。

「あっ！ さっきの変態男！ 何しに来た！」

「何度も言っている様だけど落ち着いてほしい、ボンボヤージュ」

「先輩、フランス語の挨拶はボンジュールです」

「うるさい！ わざとだわざと！」

100歩譲っても僕は自分が馬鹿だと認めたくない。アホだけど。

「敵では……ないらしいな……」

「そういえば、負傷している兵士の数が多い気がするが……この時代は休戦協定を結んでいるのでは？」

「その筈です。1431年と言えば、フランスのシャルル7世がイギリスのフィリップ3世と休戦条約を結んだはずですが……」

兵士の一人は訝し気な視線を僕たちに贈る。どうやら最初の異変をもう既に僕たちは見つけてしまったらしい。戦争が起こりえない時間に勃発している戦争。特異点という名に相応しい出来事だ。

「シャルル王か……王なら死んでしまったよ。魔女の炎に焼かれてな」

「マジで!? この時代に魔女っているの!? おっぱいでかい!？」

「俺の見た所では……たぶんDはあるぞ」

僕だけをぶん殴るなんて理不尽だと思うんだ、マシユ。話していた兵士も咳ばらいをしながら話を続ける。

「"ジャンヌ・ダルク"だ。あの方は"竜の魔女"なって蘇ったのさ」

「な、なんですって……？」

「俺たちも最初戸惑ってたが、あの姿は紛れもなくジャンヌ・ダルクだった。イングランドの軍勢も撤退して、俺たちだけが残されたが……もうどうしようもないんだ」

むう。安息できる自分の故郷で危険に脅かされるなんて思ってもいなかっただろう。ここはひとつ、この僕が一肌脱ごうじゃないか。ほぼ全裸だけど。

「落ち着いてくれ、兵士さん。一先ず今は休みながらこの本を読んでほしー」

「ん？ 何々……ほほう、これは……」

「中々いい本だろう？ 著者は黒髭というんだ、もし生き残ったらこの世界にこの本を普及してほしい」

無論のこと僕が渡したのは同人誌である。いくら兵士と言えど娯楽が無いとしんどいもんね。

この兵士と仲良くエロ本を読んでいるその時であった。獣のような大きな咆哮が聞こえ、その場にいた全員が身を凍り付かせる。

「ああ畜生っ！また奴らだ！ 全員、戦闘態勢に入れ！」

「わ、ワイバーンだって……？」

「……ふむ。この時代にはない某が唯一言えるのは、この時代には似つかない妖がいるという事よなあ」

「今更そんな事言ってもしょうがないって！ マスター、ボクたちに指示ちようだい！」

「任せろ！」

砦の内部にいよいよワイバーンの群れが襲い掛かって来ると身構えたその時。紺色の鎧と身に纏い、金色の三つ編みを揺らしながら大きな旗を掲げる一人の少女が僕たちの間を駆け抜けた。何より目を惹くのはそのおっぱい。デカイ、フランスの大地とはこうも偉大なのか。

「戦える者は私に続いて！ 皆、武器を取るのです！」

＜フランス・砦＞

砦に残留していた兵士、それに突如現れた巨乳金髪美少女と共にワイバーンの群れを撃退すると周りにいた兵士たちは気の抜けたように地面に座り込んでいます。まさか小次郎に竜殺しの才能があるだなんて思いもよらなかつた。燕返しで竜を三枚に卸した時なんて歓声ものだった。

『ようし！ よくやってくれた！ 手に汗と抹茶羊羹握りながら見入っちゃったよ！』

「ドクター。抹茶ニストと呼ばれる私の前でもしやもしや食べるのは止めてください」

「ロマン殿。某も後で頂きたいでござる」

『いいよー』

戦闘を終えたというのになんだこの緩い会話は。それに早くあの金髪碧眼美少女と接触しないと逃げてしまうと思った僕は、真っ先に彼女の元へ近づいた。

「先ほどは加勢ありがとうございますありがとうございましたマドモアゼル。僕はぐだ男。人は僕の事を愛の探求者と呼びます」

「い、いえ。こちらこそ……」

「貴女の名を伺っても？」

「ルーラー。私のサーヴァントクラスはルーラーです。真名を”ジャンヌ・ダルク”と申します」

瞬間、僕の全身から血の気が引いていくのを感じる。えっ？ 今手を握ったら可愛く顔を赤くしているのがあのオルレアンの乙女と名高いジャンヌ・ダルク？ ?でしょ？

「じ、ジャンヌ・ダルク様……？ い、いや……！ この人は竜の魔女だ！ 逃げろー！ 逃げるんだアー！」

「あつ待つんだアホ兵士どもめ！ こんなかわいい子が竜の魔女な訳ないだろ！ あ、でもそれはそれで」

「何納得してるんですか変態」

ちえっ、ジャンヌとの逢引きの最中だったのに。マシユ是最悪のタイミングとも呼べる状況で僕の所に戻ってきた。

「とりあえず、状況の説明と折り返って話があるので……その。こちらに来て頂けませんか？」

「勿論ですとも、マドモアゼル。というかそのままベッドインでオーケー？」

「OK (ズドン)」

了承の旨を言いながら腹に一発ぶち込むのはダメだと思う。普通の人間なら死んでるよこれ。そんなこんなで僕はあのフランスの聖女と名高いジャンヌ・ダルクと合流し、森の奥底へと消えていった。

第四節： 私の安珍様がこんなに変態なわけがない

<オルレアン・森林>

「ここなら落ち着けそうです。まず、あなた方のお名前をお聞かせください」

「了解しました。私の個体名はマシユ・キリエライト。こちらがぐだ男。本当に不本意ながら私のマスターに当たります」

「どうも改めて申し上げるとぐだ男です。日々彼女……否、女性サーヴァントを追い求める愛の探求者です」

「あつ貴方には聞いてないです」

辛辣。この一言に尽きる。既に風当たりが強いのはいつもの事だが、初対面の女性に蔑まれるのも悪くない。隣の小次郎とアストルフオ、エミヤからの視線が悲し気なものになっている。

「ところでこの聖杯戦争にもマスターはいるのですね」

「いえ、聖杯戦争とは無関係の立場にいます。私はデミ・サーヴァントに過ぎません」

「デミ・サーヴァント……？」

「僕の彼女って意味です。ここ必須事項ですよ」

最早恒例となったマシユの右ストレート。顎が外れかけたので嵌め直すと気を取り直して話を戻した。

「……コホン。とりあえず、デミ・サーヴァントは正規の英霊ではないのです」

「なるほど……。私は確かにサーヴァントです。クラスもルーラー、そのことは理解できています。しかし……本来与えられるべき聖杯戦争の知識が、大部分存在していません。知識だけではなく、ステータスの面でもランクダウンしています」

「つまり今襲えばやれる……？」

「オルルアッ!!!」

ステータスが下がっても僕への対処は可能らしい。持っている槍で脳天をぶつ叩かれると僕の視界は揺れ始めた。流石に気絶するほどの暴力は許容しきれない。よろしい、ならば戦争だ。

「……ところで、こちらの世界にはもう一人のジャンヌ・ダルクがいるようです。フランスを崩壊に招いているというジャンヌが……」

「同じ時代に同じサーヴァントが召喚された、という事ですか」

「じゃあそっちのジャンヌを懐柔してもいいですか？」

「駄目です」

「そんなあ！あんまりだよお!!」

「この変態はとりあえず置いておいて、私たちの目的はこの歪んだ歴史の修正です。カルデアという組織に所属してるんですよ」

「歴史修正の理由はこの僕たちの生きる現代そのものがある人物によって焼却されたからなんだよね」

ジャンヌ・ダルクは驚いたような顔を見せる。それもそうだろう、自分の死んでいった未来の世界が何者かの手によって滅ぼされているのだから。僕も最初聞かされた時は驚いた。変態紳士って言うてもたまには素の反応を見せるんだよ。

「……なるほど、良く分かりました。まさか、世界そのものが焼却されているとは。私の悩みなど小さな事でした……」

「そんな事はない。乙女の悩みは紳士の悩み。紳士の悩みは世界の悩み。というわけで僕たちはその偽物のジャンヌをぶっ倒して世界をこの手に収める」

「途中からただの願望になってませんか先輩」

「知るか！ 僕はとにかく女性サーヴァントを召喚したいんだ！ そしてあわよくば童貞卒業！」

「ジャンヌさん、この世界を救った後に先輩をボコるのはどうでしょう」

「賛成です」

そう言いつつ前が見えなくなるまでフルボッコにするのはひどいんじゃないか後輩。「ボコる」と心で思ったなら既に行動は終わっているってどこのイタリア人だよ。

「……まあ。本来歴史の本筋ではジャンヌ・ダルクが処刑され、そのままフランス国家は存続していくというものだったが。この世界ではシャルル王が殺されて二人のジャンヌ・ダルクがこの場にいる。マス

の股間がきゅんきゅんする。しかしまあ普段は活気づいている町がここまで破壊されてしまうと、僕もボケる気にはならない。

「ッ！ あれは！」

「原住民の女性がワイバーンに襲われかけてます！ マスター！」

「任せろっ！」

「つて、ちよっ!? 主殿が前に出る事は——！」

本能的に怒りを感じていたのだろう、僕の身体は足を挫いて動けなくなっている女性の前に自然と立っていた。緑の鱗に全身を覆われている巨大な飛翔竜は、まるで僕らをあざ笑うかのように唸り声を上げる。

「来い!! このトカゲ野——」

瞬間、僕の身体にワイバーンの口から吐き出された熱線を伴ったブレスが降りかかった。思いもよらない反撃に一度だけ走馬燈を覚えたが、僕の後ろにいる彼女の事を考えたらそんな事などどうでもよくなった。

「先輩っ！」

「マスターっ!!」

マシユとジャンヌの悲鳴が聞こえ、小次郎とエミヤの怒号が飛び交う。ああ……最期に僕は女の子を守れた紳士になれて良かった……。

しかし、僕を襲ったのは死の恐怖でもなく、熱線ブレスの熱さでもなく、やけに身体に降りかかる開放的な寒さ。恐る恐る目を開けると、目の前にはやけに申し訳なさそうな表情を浮かべたワイバーンの姿。

「……その美しいマドモアゼル。お怪我はありませんか？」

「いやーっ!!! 来ないでええええ!!」

「えっなんで僕何もしてな——」

僕の右頬に彼女の左フックがダイレクトに命中する。彼女の柔らかなく白い手から繰り出されるパンチに快感を覚えながら下半身へ視線を向けると、なんとマイサンが僕に挨拶をしていた。

ああ、なるほど。つまり僕はワイバーンに服だけ燃やされたわけだ。

「せ、先輩……」

「おいゴリアこのワイバーン!!! テメエなんで僕の服だけ燃やしてんだ!! 燃やすなら向こうにいる金髪のジャンヌって子の服を燃やせや!!」

「ガウウウツ!? (ツツコミどころそこなの!?)」

モンスターにさえツツコミを入れられる主人公って僕斬新だと思うんだ。隙を見たエミヤと小次郎が目の前に立っていたワイバーンを一刀の下に斬り捨て、僕の前に立つ。

「主殿、不要なことは為されるな。貴殿が死んでしまえば拙者たちも瞬く間に消えてしまう」

「アサシンの言う通りだ、マスター。無理は禁物だぞ」

「僕が出したのはイチモツだけどね」

「上手い事言っただけな顔をやめろ」

先ほどの女性はマシユたちによって無事保護され、残りの敵を片付けるととりあえず僕達は他の生存者たちを救助する事にした。ちなみに現在僕はまたほぼ全裸である。

「うーん……やっぱりもう一人くらいサーヴァントを召喚した方がいいかもしれない……マシユ、召喚サークルを展開して貰ってもいいかい?」

「ここですか? まあ既に敵の反応は見られないからいいですけど……」

「召喚する石もちょうど持ってきてるんだ。聖女様もいる事だしきつと今日こそは女性サーヴァントを召喚できる気がする」

「ボク……なんか嫌な予感するんだけど」

不安げな表情を浮かべるアストルフオキゅんも可愛いが、僕は彼の制止を振り切って無理やり召喚陣を起動する。三つの聖晶石をサークルの中へ放り込むと、三本の光線が周囲を包んだ。そして……僕の目の前に現れたのは紛れもない”女の子”だった。

腰まで伸びた水色の髪に、側頭部に生えた白い角。チャイナドレスを彷彿とさせるスリットの入った和風の着物を纏う彼女は、僕を見るなり微笑みを浮かべる。

「サーヴァント、清姫。こう見えてバーサーカーですよ？　どうかよろしくお願いしますね、マスター様」

「き、き、来たああああああ!!　しかも僕より背の小さいロリっ子!!　可愛い！　声も可愛い！　もうだめ！　死ぬ！　可愛すぎて死ぬ!!」

「……………えっ」

瞬間、彼女——清姫の目から一気に生気が失われる。それもその筈、僕は今全裸の状態で彼女の前にいるのだから。

「さあ清姫ちゃん！　僕と一緒に世界を救おう！　あと色々な事もしようね！」

「この露出狂が私のマスターだなんて信じられませんわ！　あとなんでそんなに頭が爆発していますの!？」

「こまけえこたあいいんだよ！」

「全然細かくないから！　サーヴァントにとって一番重要なところだからそこ！」

普段のお嬢様口調はどこへやら、既に彼女の視線がゴミを見るようなものになっている。うーん、いつになったらこの視線は治るのだろうか。僕個人としてはご褒美なんだけど。

「さあ早く！　僕と契約してサーヴァントになってよ！」

「私の安珍様がこんな変態な訳ありません！　私は座に戻ります！」

「さあせるかああああ!!」

「ひっ！　必死さがキモい！」

それもそうだろう、今の僕はマッシュとジャンヌ以外女性サーヴァントを使役できていない。今の所僕の下にいるのはイケメン3人と筋肉オタクと男の娘である。必死になるのも無理はないだろう。僕は座に還ろうとするきよひーの手を掴む。鼻息を立てながら。

「ハア…………ハア…………。ぼ、ぼぼぼくのサーヴァントに…………」

「はい火生三昧」

「ああああああ!!　また燃えるのおおおお!?」

直後、この崩壊した土地で僕の身体は更に黒焦げになり数時間の間

僕の意識は彼方へと飛び去ってしまった。

第五節： ヴイヴ・ラ・フランスは魔法の言葉

<クラ・シャリデ>

「結局ますたあの不可抗力によって座から引き戻されましたわ。このひとこわい」

「よしよし……大丈夫ですよ……私が守りますから……」

いつの間にか僕が悪者になってるのが納得いかない。マシユに抱きしめられる清姫ちゃん姿に興奮を覚えながら、僕たちは崩壊してしまつたフランスの街を突き進んでいく。

とりあえず服を着ないといけないので予備用に持ってきていた全身を覆う黒タイツを着ておいた。

「……ッ！」

「なんて、事？ まさかこんなことが起こるなんて」

「なんだあの一団は！ マイナーなV系バンドがいるぞ！」

「誰がThe ALFFEEよ！ 似てるのこのおじさんだけじゃない！」

「えっ我なの？ ギター弾けないけど我」

僕の視界に黒一色に染め上げられたジャンヌと、彼女が聖杯の魔力によつて召喚したサーヴァントたちと僕らは対峙する。長い金髪のナイスミドルが既にキャラ崩壊を起こしているがもうツツコまない方が良いのだろう。

「でも……可笑しい事ね。こうしてもう一人の私と出会うなんて。私はジャンヌダルク。蘇つた救国の聖女ですよ、もう一人の私」

「馬鹿げた事を！ 貴女は聖女などではない、私がそうでないように！」

「すげえ……リアルでもう一人の僕ごっこやる人初めて見た……」

「うるさいわね！ 何よこの黒タイツ！ 誰が武藤遊戯よ！ もう！

気持ち悪いっただらありやしない！」

「あ、それには同意です。もう一人の私」

反面してる同じ人間に存在否定されるのも中々悪くない。何より金髪の美女二人が言い争っているのを見るだけで眼福である。

「……こほん。それで、この町を襲った理由ですって？ 馬鹿馬鹿しいですね。そんなもの、明白じゃないですか。単にフランスを滅ぼす為です。私、サーヴァントですもの」

「馬鹿なことを……！」

「馬鹿な事？ 愚かなのは私たちでしょう、私。裏切り、唾を吐いた者たちと知りながらなぜ救おうとしたのです？」

「それは……」

ジャンヌ達の議論が白熱しているところで、僕は黒ジャンヌ側にいるやけに服装がエロい紫髪のサーヴァントへ向けて左手の指で輪っかを作りながらその穴に右手の人差し指を通す。

このジェスチャーが分かっているように、彼女は隣にいた緑の服を着ている貧乳美少女に説明を尋ねていた。意味が分かるなり彼女は僕へ中指を立て、僕は笑みを浮かべる。

「……人類種が存続する限り、この憎悪は収まらない。このフランスを死者の国に作り替える。それが私。それが死を迎えて成長し、新しい自分になったジャンヌダルクの救国です」

「な、なにを……！ ってマスターさつきから何やってるんですか？」

「いや性的なアピールをしてました。あのおっぱいで聖女は無理でしょ」

「黙れ変態！」

この場にいるほぼ全員が団結して僕に色んな攻撃をしてくるって酷くない？ しまいには旗付きの槍で脳天貫かれる始末。これはひどい。

『サーヴァントが人間として成長するケースがあるのか……？』

『うるさい蠅がいますね。あまり耳障りだと殺しますよ？』

『うわっ?! コンソールが燃え出したぞ?! あの手サーヴァント、睨むだけで相手を呪うのか!?!』

『ずるいドクター！ 僕も燃やされたい！』

『あ、どうぞ』

また黒タイツが燃え尽きてしまった。今回は上半身だけだったか

ら有難いものの、この状態になってしまつては僕の心の師匠である江
○2：50さんになるしかない。

「……貴女は、本当に私なのですか……？」

「呆れた。ここまで分かりやすく演じてあげたのに、まだそんな疑問
を持つなんて。なんて醜い正義なのでしょう。この憤怒を理解でき
ないのでなく、理解する気さえない。貴女はルーラーでもジャンヌ
ダルクでもなく、私が捨てたただの残り滓に過ぎないという事がよく
分かりました」

「くっ……！」

「バーサーク・ランサー、バーサーク・アサシン。その田舎娘と連中を
始末しなさい。あと変なポーズとつてる黒タイツは入念に痛め付け
て」

ドSプレイとはまた興奮する。僕にとって喜びにしかならない事
をやってくれるなんてなんとも良い聖女だろうか。もうあつちの陣
営についちやおうかな。

「——よろしい。では、我は血をいただこう」

「いけませんわ王よ。私は彼女の肉と血、腸を頂きたいもの」

「マジで!?! その銀髪エロエロドS美女! 僕は全てをささげよう
!」

「要らないわ」

「なあああんでだよおおお!!?」

心からの悲鳴。ボンテージ調の衣服をまとった彼女は引き攣った
笑いを浮かべながら隣の男性の陰へと隠れる。

「……強欲だな。では私は魂を頂こう」

「ふふふ。血を啜る悪魔になり果てた今になって、彼女の美しさを理
解できるようになっただなんて」

「くっ……！」

「……マスター。ん、マスター? カメラ構えて何してるんです?」

「いやあの美女とジャンヌのレズプレイを写真に収めようと……」

持った盾の穂先をケツに突き刺すのはマスター酷いと思うんだ。

それはともかく、既にジャンヌのあの二人は戦闘を繰り返している

ようで僕は即座に小次郎と清姫、エミヤに戦闘態勢へ入る事を指示する。

「絶叫せよ」

「くっ……こいつ……！ バーサーカーか！」

「私を忘れてもらっては困るわね、侍」

「……ほう、お主もあの女狐と同じ性質を持っていると見た」

バーサーク・アサシンから放たれる光弾の数々を躲す小次郎と、槍を持ったバーサーク・ランサーと斬り結ぶエミヤ。その様子を見守る事しか出来ない僕の隣に立つ清姫が手にしたセンスを口元へ運びながら呪文を唱えている。

「ますたあ。貴方の事を良く思っていないくとも、私は貴方のサーヴァント。全身全霊を以て、あの敵を打倒しましょう。どうかご照覧あれ！ これより逃げた大嘘つきを退治します。 ” 転身火生三昧！”」

「むっ……これは……」

「アサシン！ 戦闘から離脱しろ！」

二人は清姫が宝具を展開すると同時に後方へ飛び退き、青い炎の竜が現れたと同時に僕の両隣へと舞い戻った。

青い炎に包まれていてもまだしもバーサーク・アサシンとランサーは健在だが、だいぶ体力を減らされてしまったと僕は予測する。

「あんな小娘を仕留めきれないだなんて……温情でもお掛けになったのかしら」

「……ふん。悪魔と謳われた吸血鬼らしくあるまいな」

『悪魔……そうか。ルーマニア最大の英雄、ヴラド三世か……』

「人前で我が真名を明らかにするとは。時を統べる魔術師よ、不愉快極まるぞ」

あれだけ余裕のあったバーサーク・ランサー、もといヴラド三世は笑顔を浮かべていた顔を苦痛に歪ませた。

本来真名を隠して召喚されるサーヴァントにとって元の名前がバレてしまうのは自分の弱点を晒すことにもなるし、そして彼らは過去の名にトラウマを抱えた人物が多く存在する。

ヴラド三世がこういったように不快感を露わにするのはサーヴァ

ントとして道理とも言えた。

「まあ良い。その少女よ……お主に一つ質問がある」

「あら、同じことを思っていたのね。年端のいかぬ少女なのに戦闘だけは熟練の技。矛盾しているわ、何者かしら？」

「……デミ・サーヴァント。確かに、召喚された普通のサーヴァントとは違う存在」

黒いジャンヌ……もとい、ジャンヌ・オルタは僕の隣に立っていたマシユの正体を言い当てて見せる。

「それが君たちにとってどういった事に繋がる。彼女は僕が初めて契約したサーヴァントだ、文句は言わせない。あとこの戦いが終わったら踏んでほしい」

「先輩……一言余計ですけど嬉しいです……」

「マジで！ 僕今かつこいいい!? よし、この任務をクリアしたら僕の部屋において」

「嫌です」

即答は先輩泣いちゃう。マシユを守るように使役していたエミヤと小次郎が彼女たちの前に立ちはだかるが、ジャンヌ・オルタのサーヴァントたちとの闘いでだいぶ疲弊しているらしい。

「まあ良いでしょう。さあ、この場にいる全員の首を斬り落とさなさい」

「マスター、マシユさん！ 私たちの後ろに隠れて！」

「いくら変態とはいえ、私のますたあを好き勝手されるのは納得いきませんわ」

「きよひーがかっこいい。あとで膝枕してもらってもいい？」
「嫌です」

きつぱり断るのもますたあ泣いちゃうよ？ あのスリットから伸びた白い太ももに包まれたかと思っただけでないはず。隣に黒髭が居たら全力で同意してくれるはずだ。

その時、ガラス製の羽の生えた馬が僕たちの背後から駆け抜け、オルタ達との間に割って入るように銀髪的美少女が舞い降りた。可憐の一言に尽きる彼女の姿に僕は釘付けになり、思わずマイサンも反応

する。

「あ、貴女は……！」

「バーサーク・セイバー。あの女の正体、知ってるの？」

「忘れるはずもない、ヴェルサイユの華と謳われた少女。マリー・アントワネット……」

「はい、ありがとう。私の名前を呼んでくれて」

「うおおおおお!! ヴィヴ・ラ・フラアアアンス!!!」

何故か知らないけど僕は両陣営からボコボコにされた。突然現れた美少女——マリーに踏んでほしいと懇願しただけなのに。

第六節： マリーに踏まれたい

<オルレアン・草原>

「……ふう。ここまで逃げれば大丈夫かしら？」

「はい。つてあれ……？ マスターの姿が見当たりませんが……」

「みんなあく〜！」

ジャンヌ・オルタ率いるサーヴァントたちからマリーの宝具であるガラスのペガサスで逃げ切り、崩壊した街からこの草原に辿り着いた。

まあ僕はマリーちゃんに踏んでほしいと頼んでしまったせいとか、両陣営からフルボッコにされた僕は彼女の宝具から蹴落とされてしま

う。

なので僕は自律機動型飛行生命体と化し、こうして股間のマイサンをヘリコプターのローターよろしく回転させて空を飛んでいる。

「……………えっ」

「マリーさん、申し訳ないんですがあの変態が私たちのマスターです。もし変なことをされたら迷いなくぶっ殺してください」

「はっはっはー！ 某のマスターは面白い男よなあ！」

「どうしようマシユ！ 小次郎さんが泣きながら笑ってるよオ！」

僕の陣営から阿鼻叫喚の様子がよく伝わってくるが、気にせずには華麗に地面へと着地した。あのアストルフォきゅんでさえも若干僕に引いてるのが辛い。

「まあマスターの事は置いておき……ドクター？ 反応は見られますか？」

『いや、反応は消失してるよ。あとぐだ男君のストッパーとしてティーチをそつちに呼んでおくね』

『ファッ!? 拙者いつからマスターのストッパーになったんでござるかあ!? だって今回はお休みだつて……あつちよっ！ この服装のまま召喚されるのきついから！ 今普通に私服だから！』

通信端末から聞こえてくる黒髭の必死の抵抗虚しく、僕の前に何故かTシャツ短パン姿の黒髭が現れた。彼は額に冷えピタを貼り、手に

は作りかけのプラモとスミ入れ用の筆ペンが握られている。

「なんだ黒髭！ その恰好は！ ちゃんと特異点を無くすっていう意識があるのかい！」

「マスターに言われたくねーよ！ あんたが一番やる気ないでしょ！」

「そう思われるのも仕方がない。何せ僕は今普段の魔術礼装が焼け落ち、黒タイツを穿いているのだから。マリーちゃんの隣にいる派手な服装に身を包んだ金髪のイケメンが僕の下へと近づいてくる。」

「いいねえ、君。何か芸術性を感じるよ。バンド組まない？」

「マジで!? ようやく僕の魅力に気づく男が現れたとは……君、名前は何？」

「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。しがない音楽家さ」

自分ではしがない音楽家とは言っているものの、生のモーツァルトに出会えるとはかなり貴重な体験だ。僕は彼と握手を交わし、マシユから渡された灰色のパーカーを羽織る。

「それでドクター。これからどこへ向かえばいいでしょうか？」

『この先の森林に霊脈の反応が見られた。ぐだ男君の魔力も温存しておきたいし、ここで魔力の補充を行おうと思うよ』

「魔力の補充……？ はっ！ つまり僕は女性サーヴァントとどのいかがわしい行為を体験できる……？」

「マスター。それは止めにして拙者の懐に仕舞ってある本でシコるといいでござるよ」

「なにい？ そこまで言うなら……うーんこれは爆シコ」

流石に黒髪の巨乳お姉さんの同人誌を持って来られたら僕もこう言わざるを得ない。既に見慣れた痛々しい視線を肌で感じながら僕たちは森林へと入る。

ダ・ヴィンチちゃんによるサーヴァント相性の説明を受けながら、いったん休息を取ろうと開けた野営地へと僕は腰を落ち着けた。

「落ち着いたところで、改めて自己紹介をさせていただきます。私はマリー・アントワネット。クラスはライダー。召喚された理由は不明ですが、よろしくお願いいたしますわ」

「改めて、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。僕も彼女と右に同じさ。確かに高名な芸術家だけどここに召喚された理由は分からないね」

「僕と一緒に特異点を救う……それだけでも理由は十分さ。マリー、モーツァルト。この特異点を救う事に協力してほしい。僕の行動からは見て取れないかもしれないけど、この思いだけは本気だ」

いつもとは違う真面目な雰囲気を漂させる僕に、マシユたちの不安げな視線が突き刺さる。

仕方のない事だけど、本当にこの歴史を修正する事には本気だ。

「……分かりました、マスター。わたくしは今から貴方のサーヴァントとして、仕える事を誓います」

「うん。僕は分かっていたよ。この世界が滅ぼされるといふ事は、僕の偉大な作品たちが受け継がれない事に繋がるからね」

「ありがとう、アマデウス、マリー。ジャンヌダルクと一緒に、このフランスを救おう。歴史が変わるといふ事は、君たちの生きてきた人生が全て否定されたことになる。僕はそれが許せない」

僕は特に歴史の授業が好きだった。それこそ、マリー・アントワネットやモーツァルトのような歴史に名を刻んだ人間たちが否定されるようなことは僕には許せない。

佐々木小次郎と言ひ大海賊エドワード・ティーチと言ひ、僕の下には多くの高名な人間が集まり過ぎた。

ならば僕は彼らの人生を肯定するまで。

「まあ！ そちらの方はかのジャンヌダルクだと言うのね！ 光栄だわ、わたくしのような人間が聖女と呼ばれた方と共に戦えるだなんて！」

「私が聖女と呼ばれたのはあくまでも結果論です……。でも、そう言っていただけだと私も救われます」

「ねえアマデウス。二人のカップリングどう思う？」

「最高」

「拙者も同意」

ねえマシユ。いきなりふざけた瞬間にケツに盾を刺すのはひどい

と思うんだ。隣の黒髭も頭にジャンヌの槍を刺され、アマデウスもマリィ・アントワネットに足蹴にされている。

どんなご褒美だアマデウス。僕は羨ましいぞ。

「……とりあえず。霊脈の魔力からマスターの魔力を回復し、一旦休息をとってから次の目的地へと進もう。そうだったな、マシユ？」

「そうです、エミヤさん。ほら、先輩も早く立って」

「僕のマイサンは既に勃っているよ」

僕の意識はマシユの痛烈な一撃により再び彼方へと消し飛んだ

第七節：あのおっぱいで聖女は無理がある

<森林>

「とりあえず、話は分かりました。このままあの黒いジャンヌダルクにフランスを滅ぼされてしまつては、世界の危機なのです。形は違えど、これもまた聖杯戦争、という訳ですか」

「そうですマリイさん。あとその足元にある音楽家を僕に置き換えてほしいかなつて」

「ふざけんな！ この位置は僕のもんだぞ！」

「黙れ変態！」

「お前もだろうが！」

マリイ・アントワネットの足元に佇むアマデウスが羨ましすぎる。本当に僕と変わつてほしい。

「……ちっ」

「あつごめんマシユ、決して君の足が嫌だつて事じゃないんだ。むしろ気持ちいいから大丈夫だよ」

「黒髭さん、この人やっぱり殺していいですかね？」

「駄目ですマシユ氏。そしたら世界終わっちゃいますぞ」

僕の頭に乗っているマシユの足の力が更に強まっていく。きつと彼女は生粋のDSに違いない、僕にはわかるよ。とりあえず足蹴にされていた僕たちはその場から立ち上がり、身体に付いた砂埃を落とす。

「でも、こう見てみると戦力は拮抗しつつあるよね。アマデウスもマリイも来てくれたし、それにボクたちにはジャンヌもいる。勝てる見込みがだんだん湧いて来たんじゃないかな？」

「あ、分かった！ ひらめきましたわ！ こうして私たちが召喚されたのは英雄のように彼らを打倒する為でしょう？」

アストルフオキゆんとマリイの絡みが可愛すぎる。全く会話が頭に入っていないのはいつもの事だが、僕が口を開こうとした瞬間にマシユから殺意を向けられたので黙つておいた。

「根拠のない自身はいいけどね、マリイ。相手は掛け値なしに強敵だ

ぞ。ジャンヌとマシユ、それにぐだ男とそのサーヴァントたちは戦いに慣れているとしても……僕と君は前線に立つタイプじゃあない。戦力差は未だに空いたままだと思うけどね」

「……確かに、アマデウス殿の言う通りで御座るな。ヴラド三世にエリザベート女王、加えてジャンヌダルクとその使役するサーヴァント……。某が見た所彼らはなかなかの腕の持ち主よ。特にあの紫髪の聖女とやら……彼女は手ごわいぞ」

小次郎の言葉に周りの空気は重いものへと変貌する。本来は武人としての成り立ちがあるからこそ、小次郎の感覚は本物だ。

「それにあの金髪のセイバー……。彼女は君の存在を知っているようだったが？ マリー・アントワネット」

「……そうね。もし彼女が私の事を知っているのなら……きつとシユヴァリエ・デオンじゃないかしら。分かるのよ、私」

「あの子の名前はデオンちゃんっていうのか……。今度セクハラしない」と

「たぶん剣でスタスタにされると思うわ。あの子めちやくちや剣強いし」

可愛い子にボコボコにされるのなら本望である。言葉には出さないが顔に出ていたのか、黒髭とアマデウスのみが頷き、僕はより一層絆を彼らと深めた。

「もし彼らが改心するのなら、こちらの陣営に組み込める事はできませんかな？ マリー氏の知り合いならばそれが容易だと拙者は考えますぞ」

「それは難しいと思います。私の能力で彼らの能力を見てみたのですが、黒い私により狂化を施されているようですね。歴史の有無など関係なく」

『……聖杯の力か。狂騒の話が無くても英霊にバーサーク状態を付与できる……厄介な話だ』

僕にもバーサーク状態を付与してほしい。そしたら思いのままに女性サーヴァントへのセクハラが可能になるのに。また顔に出ているのか、黒髭とアマデウスは「わかる」と口パクで僕に告げ、更に絆

が深まる。

「でももし仮に、こういつたサーヴァントが召喚されているのなら……マリー達の他にも召喚されているサーヴァントがいるという事じゃないのかな？　ボクたちも彼らに対抗するためにさ」

「まあ！　それってまだ新しい誰かに出会えるって事ね！」

「そうだねマリー。とりあえず僕も踏んでほしい」

「えい」

踏むって事は蹴る事じゃないんだよマリー。流石に本気の蹴りは血を吐くからやめてほしい。

でも気持ちいいから良しとする！

「ますたあが踏まれてるけどいいんですか？」

「既に見慣れた光景だ。気にすることは無い。というかこの時の方が話を割られずに済む」

「おいゴルア！　エミヤてめえ扱いが雑だぞ！　お前の元カノ連れてこいー！」

「傷を抉るな！　全ルート回つたら心が死にかけたんだぞ!!」

切実すぎるエミヤの言葉に僕は正直引く。

心がガラスと言わんばかりの彼の悲鳴に隣の黒髭がエミヤの方を叩いた。

「と、とりあえずここで一旦休息を取りましょう。霊脈も確保できたことですし、サーヴァントを召喚されては如何ですか？」

「なんか踏まれた状態で召喚すると女性サーヴァントが出そうな気がする。よし召喚だ」

なんとも緩い状態で令呪の刻まれた右手を展開された召喚陣にかざす。

すると9つの光球が普段とは違う虹色の光を生み出し、金色のカードが周囲に光を放った。

そこから青いドレスを纏った金髪の女性が現れ、僕は思わず目を見開く。

「問おう。貴方が私のマスターか？」

「……………」

「……あれ？ あの、貴方が私のマスターか？」

まさか本当に女性サーヴァントを召喚できるだなんて。隣のエミヤはなぜか右手で顔を覆っているが、気にせずに僕は彼女と話を続ける。

「や、やあこんにちわ！ 僕はぐだ男。踏まれている状態だけど僕が君のマスターだ」

「は、はい……よろしくお願いします。マスター」

まさかかの有名なアルトリア・ペンドラゴンをこの手で召喚できる日が来るとは。マリーのおみ足というのは本当に力のあるものらしい。きよひーやマシユ、ジャンヌが何故か可哀想なものを見る目でアルトリアを見ているが、それは見なかつた事にしよう。

「おや？ その赤蓑は……もしやアーチャーか？」

「あ、ああ……そうだ、セイバー。また会うとはな」

「某もおるぞ、セイバー。久しいな」

「おお！ いつぞやの侍ではありませんか！ あの時は貴方と剣を交えられて光栄でした」

「うむ。此度は同じ味方となる。共に戦えて光栄だ、騎士王よ」

そういえば、小次郎とエミヤは過去の聖杯戦争でアルトリアと戦ったライバル同士だったな。このように記憶を引き継いでいるとなるとなんとマスター冥利に尽きる。

「ねえねえアルトリア。アーチャーの事は……ごによごによ」

「え？ ま、まあそう呼ぶのは構いませんが……」

何やら不穏な雰囲気を感じ取ったのか、エミヤからの睨みが僕に突き刺さった。

ふふ、もう遅いぞエミヤ。ネタは仕上がっているんだ。

「えつと……その……よろしくお願いします……シロウ」

「ああアアアッああアアア!!! マスターああアアアッ!!!」

<夜・森林>

変態紳士にはうまく気を利かせたつもりなのに当の本人は全力を以て僕を殴ろうとするのに納得がいかなかったが、ひとまず召喚

も終えて僕たちは森林で火を熾しながら野営地を製作していた。

ぶつ殺してやると言いながらエミヤの外見が赤い服装から黒いものに変わりかけたのは正直驚いた。

今後エミヤの元カノについて言及するのは止めておこう。

「ねえマシユ。すごい静かだね。まるでこの世界に僕と君しかいないみたいだ」

「は？ きつしよ」

「辛辣」

どこでそんな言葉覚えたの。マスターそんな言葉づかい許しませんよ。

「……主殿。雰囲気と普段の言動を考えては如何か。そんな事では、女子の一人も落とせんぞ？ 拙者が手本を見せよう」

そういうと小次郎はマシユの隣へと近づき、彼女の肩に羽織っていた陣羽織を着せる。

元々端正な顔立ちの小次郎があんなことをやってしまったのは僕のダメっぷりが更に際立つからやめてほしい。

「マシユ殿。いくらサーヴァントとして契約した身とは言え、お主は生身の女性と大差ない。そのお身体をご自愛されよ」

「あつ……小次郎さん……有難うございます……」

「うむ、お主はやはり笑っている方が美しい。努々忘れてはならぬぞ、マシユ殿は可憐な華のように美しいとな」

「そ、そんな事ないですよ……えへへ……」

なんだあの顔。僕に一度も見せた事無いぞ。おい小次郎、僕へそのサムズアップを向けるのを止めろ。

まるで童貞とイケメンの差を見せつけられた様じゃないか。

ようし、僕もやってやる。

「マシユ。僕のズボンも穿くといい。そんな彫刻のようにきれいな生足を出してしまつては寒いだろう」

「いやああああ!!!! なんで脱ぐんですか!!!!?」

忘れてた。今の僕は黒タイツだけだったんだ。また生まれたままの姿に戻ってしまった僕に、マシユの張り手が突き刺さる。先ほど召

喚したアルトリアの視線が既にドン引きしたものに変わってるのは
ご愛嬌。

「主殿……流石に脱ぐのはまずいなあ……」

「ぶぐぶぐ」（前が見えねエ）」

「マスター、ボクのマント着てね？ さすがに全裸は絵面的に終わっ
ちやうから」

アストルフオキゆんの白いマントが僕の全身を包み込む。男なの
になんでこんないい匂いがマントから漂うんだろう。もうアストル
フオキゆんは女の子でいいんじゃないかな。

「ローランみたいなことはしちや駄目だよ？ 女の子に嫌われちやう
からさ」

「僕はアストルフオキゆんさえいればいいかなって思うんだ。なあ黒
髭にアマデウス」

「全面的に同意」

「僕もそう思う。ってかその性的な容姿で男つてのが反則だよね」

各自ストッパーに足蹴にされる辺り、僕たち三人は本当に気が合う
のかもしれない。

うーむ、世界の偉人たちに変態性を並べる僕って何者なんだろう
ね。

そんな時、エミヤの隣に座っていたアルトリアが何かを感じ取った
ようであり座っていた丸太から立ち上がる。同時に僕の耳に装
着されていた通信端末が起動し、ドクターの声が響いて来た。

『ぐだ男君！ サーヴァント反応だ！ おそらく黒いジャンヌの手先
だろう！』

「何ッ！ 女か!? 男か!？」

『喜ぶぐだ男君！ 女の子サーヴァントだ！』

「ッしやああああオラアアン!!!」

アストルフオキゆんのマントの留め具を留めて全身を隠した後、足
蹴にされていたきよひーの足から立ち上がると僕は反応があった先
へと視線を向ける。

その先には半分肌が露出している礼装を纏ったサーヴァントであ

り、そしてさつき僕がセクハラしたサーヴァントであった。

「……こんばんは、皆様。寂しい夜ね」

「何者ですか、貴女は？」

「何者？ そうね……自分でもわからないのが辛い所です。壊れた聖女に使役されて——」

「あつ!! 君はあの時のドスケベエロエロサーヴァント!!」

まさに運命と言っても過言ではないだろう。紫髪の彼女はその胸に提げた二つの豊満なメロンを揺らし、僕らの前へと現れた。

あのおっぱいでサーヴァントは無理があると思うんだ。

「あつ、あんたは! よくもあの時はえっちな事言ってくれたわね!?

ふざけんじやないわよ! 真面目な場面だつてのに一人だけ赤くなつちやつたじゃないの!?!」

「だつてその服装で見えるなつて方が無理あるでしょう!?! どう思うみんな!!」

「無理だな」

「あの胸に包まれないで御座る」

「拙者は踏んでほしい」

「屈服させたいね」

「ボクは甘やかされたいな」

ほれ見ろ。エミヤや小次郎、アストルフオキユンでさえも同意してくれるとは思わなかったが男性陣からは賛成で一致のようだ。ここまで結束が固くなったのは初めてだね。

対して女性陣からは養豚場の豚を見る視線が僕らに投げかけられた。正直気持ちいいのでもっと見てほしい。

「ああもう! せっかくかっこよく登場したつていうのに! 覚悟しなさいね!……」コホン、覚悟なさい。異世界のマスターよ」

「いやそのキャラは無理があるでしょ」

僕にしてはまともな事言ったのに殴るのはひどいと思うんだ。

第八節： 秘技！ マスターがブロークンファンタズム

<森林>

エロい服装に身を包んだ紫髪のサーヴァント、聖女マルタは十字架を模った杖を掲げて幾つもの魔法陣を展開する。そこから幾つもの魔獣が姿を現し、さつき僕の服を燃やした忌々しいワイバーンの姿も見えた。

「ええい！ またワイバーンか！」

「こうもポンポンとあの飛竜を出されると……キツイものがあります」

「令呪を以て命ず。あのトカゲもどきをぶち殺せ」

「マスターア!? 個人的な恨みが含まれすぎてるんですけどお!!」

当たり前だ。僕のイケメンタイムをあつ鱗に覆われたクソ爬虫類は絶対に許せない。僕の服もこうして魔術礼装から黒いタイツだけになつちやつたし。

僕の使役するサーヴァントは一斉に緑鱗の竜もどきに向かっていき、聖女マルタに召喚された他の兵士やアマゾネス達の視線が僕に一気に集中する。

「そんな事しちやつたらますますあが他の敵に狙われてしまいますわ！」

「先輩!! 逃げてくださいッ!!」

「マスターッ!!」

僕を守る者がいなくなつたと同時に隙を突こうと操られたフランス兵やアマゾネスの兵士が一斉に飛び掛かって来た。フツ……こうも舐められてもらつては困るんだよ……。

「ほわつたアッ!!」

切り掛かってきたフランス兵の頬を掌底で弾き飛ばし、周囲にマルタの使役した魔物たちが僕を取り囲む。兵士の槍を拾い上げ、頭上で何回も回転させながらわきの下へ挟んだ。

「僕が守られるだけの男だと思っくんじゃねえぞお!? こちとらモテようとして通信空手10年以上やっとなんたんじやい!!」

「モテようとするベクトルが違うぞマスター!」

「黙らっしやい! ほらあドンドン掛かって来いよ! あっ、アマゾネスさんたちは後で僕の事踏んでね!」

そう言つてアマゾネスしか向かつてこないのはずるいと思うんだ。アマゾネスさんたちに殴られて腫れ上がった僕の顔をお化けと思つてビビったのか、フランス兵やアマゾネスさんたちは逃げ帰つていく。

操る魔力を破る程の僕の顔面の酷さつてどうなんだろう。

「くう! なんてこうなるのよ! ワイバーン、あの男をやっっちゃいなさい!」

「ガウウウ! (はい! 姐さん!)」

「誰が姐さんよ! 早くやりなさい!」

マルタさんの号令と共にワイバーンの軍勢が僕へと襲い掛かって来た。手にしていた槍を構えるが、ワイバーンの爪が僕が切り裂くよりも早く青と赤の蓑を纏つた男女が立ちはだかる。

「マスター! 無事ですか!」

「無理はするな! セイバー! 合わせるぞ!」

「御意!」

なんともこの二人は頼りになる。セイバーとエミヤの間に入るように小次郎が二人の隙をカバーし、三人共神業ともいえる太刀筋でワイバーンの群れをなぎ倒していった。

「くっ……! なかなかやりますね……!」

「小次郎氏! 残ったワイバーンの殲滅をお願い致しまする! 拙者はあのライダーの胸を!」

「おいゴルア黒髭エ! それは僕の役目だ!!」

「いやいやいや! 僕の方が相応しい!」

「テメエら一回黙つてろ!」

戦闘中にも関わらず黒髭と僕とアマデウスを足蹴にする余裕があるマシユとマリーと清姫はかなり強い部類に入ると思うんだ。あつ

黒髭が良い笑顔を浮かべてる。分かるぞその気持ち。

「ああもう！ なんなのよあんたたち！ 変態と戦士しかないの!?

」

「あの本気であの変態達と一緒にするのは勘弁してください」

「私もですマルタさん」

「わたくしも」

「ボクも」

「あつごめんなさい」

存在全否定はひどくない？ さすがに泣くよ？

「よしエミヤ！ 僕と君で合体技だ！」

「な、何をするつもりだマスター!？」

「僕を矢にして射るんだ！」

「無茶苦茶じゃないか!？」

エミヤの反論もいざ知らず、僕は彼の弓の弦に股をはめ込み両手を伸ばす。弦に掛かったマイサンが悲鳴を上げているがこの際気にしてはいられない。

三本の矢と共に僕がそのまま射出され、そして股間に溜まっていた魔力を放出すると同時にその一体が爆発に包まれた。

「まっ、マスターが!？ 大丈夫なんですか!？」

「安心してくださいセイバー氏。あれでもマスターはほぼ無傷ですぞ」

「そんな筈は……!？」

「ご安心ください、それが変態クオリティ。セイバーの心配も無用に終わるだろう、何せ僕はいまマルタさんの目の前で全裸で立っているのだから。」

「いやああああああ!! 何よこいつ!! 裸だしなんかドヤ顔なのが腹立つし！ 私こんなので座に還りたくないわ!!」

「僕の全裸は全年齢対象さ。監査も安心のぐだ男クオリティ。実は男の裸体好きなんですよ？ その服が全てを告げているよ」

「んな訳ないでしょ!!」

「ええ？ 本当でござるかあ？」

「うるさい！　つかなんなのよこの侍も！」

怒りと悲しみを孕んだ表情で消失していくマルタさんのドスケベ礼装を目に刻み込み、僕はケツに挟んでいたスマートフォンで彼女の様子を写真に収める。何故かスマートフォンが爆発して僕はあつという間に黒焦げになってしまったけど全裸よりはマシだからいいかな。

「……ふっ。決まったな、これぞ僕のグランドオーダー……って痛いなんでマシユ殴るの」

「ワタシ　ヘンタイ　ユルサナイ」

「ヒエツバーサーク状態になってる！　痛い痛い痛い！！　マスター特攻なんて聞いてないよ!?!」

『今しがたマシユの能力の上昇が確認されたね。その調子だぐだ男君』

「ふざけんな！　変態で能力値上がったたまるか!!」

前回と同じようにマシユの殴撃により僕の顔はボコボコに腫れ上がる。

そろそろこのたんこぶでさえも愛着が湧いて来たよマスター。

「ひ、ひとまずライダーも倒したことだし休憩に入りましょう。マスターの消耗も激しそうですし」

「この通りなんともない。というかあともう一回戦いけるよ」

「あつ丁度良い時にシャドウサーヴァントが来ました」

「いやそれどう考えてもヘラクレス!!　さすがにタイマンでヘラクレスは僕死んじや——」

そう言いかけた瞬間に僕の意識は彼方へと消えた。

意識が消し飛ぶ際にみんなの歓声が聞こえたのはあえて聞かなかった事しておく。

第九節：性別はアストルフオ

<草原>

「みんなー！ 情報を貰ってきましたー！」

「すいません、マリー。私が街に行くのとそれだけで大騒ぎなので……」

「僕も情報集めてきたよ。返ってきたのは拳だけだったけど」

「そりゃあ半裸で近づけばそうなるでしょうが……」

でもフランスの可愛い女の子にぶん殴られたのは気持ちよかった。黒髭とアマデウスを連れて行ったら「おかしい人間ってあんたたちの事でしょ！」と言われて拒否されたのは納得いかなかったが。

「聖女マルタが教えてくれた都市、リヨン。結論から言うところには少し前に滅ぼされたらしいんですけど、そこから逃げてきた難民たちが住み着いたようですね」

「ふむ……リヨンには怪物たちが闊歩している様ですね」

「拙者たちも集めてきましたぞい。どうやら拙者とマスターとアマデウス氏だけ、難民たちの新たな脅威として受け入れられてるようですぞ」

「当たり前だろ馬鹿！ 3人共半裸で聞き込みしたらそうもなるわ！」

最近服を着ると乳首が圧迫されてしんどいんだよね。それに究極のネイキッドスタイルだし受け入れやすいと思っただけだけど彼らにはまだ早かったらしい。

「それに詳しい話も。なんでも、リヨンには守り神がいたんですって」

「守り神……ですか？」

「大きな剣を持った騎士さまが化け物たちを蹴散らしていた、とか」

「大きな剣だったら僕の股間にも付いてるよ」

「テメーのはダガーだろうが!!」

さすがに羽交い締めにして殴るのはひどいと思うんだ。あつでも僕を抑えてるジャンヌのおっぱいが背中当たってるのが堪らん。

既にアルトリアが口調崩壊してるのはなんだか複雑な心境だ。

「なるほど。それがもしかすると、マルタ様が言っていたサーヴァン

トかもしれませんね」

「ええ。でも、少し前に黒いジャンヌのサーヴァントたちがやって来た」

「かくして……リヨンも滅ぼされてしまった……」

ジャンヌの言葉にその場にいた全員が頷く。

難民たちの中にいた美少女を守るためにはどうにかして魔の手から彼女たちを救い出すしかない。

「そのサーヴァントとやらが生きている保証は低い……少なからず私たちだけの戦力で連中を倒すことを視野に入れておいた方が良かったろう」

「アーチャーの言う通りよな。幸い某はあの蜥蜴擬きを殺すことに長けているようだ、以降あの者共の処理は任せて貰っても構わない」

「小次郎素敵！ 抱いて！」

「はっはっは、半裸でくつつくなマスター。某は男色の気はないぞ」

無論僕もホモの気はないと言っておく。

でもアストルフオキくんは余裕で抱けるので問題ない。

「そうそう。シャルル7世が討たれたのをきっかけに混乱していた兵をジル・ド・レエ元帥が纏め上げたそうよ」

「嘘……ジルが……？」

「おそらくリヨンを取り戻すために攻め入ろうとしているのでしようなあ。拙者もし同じ立場だったのなら、こんな大規模な都市で兵がないところには攻め入るでござる。所謂、恰好的というものでもありますな」

普段よりも真面目な黒髭の雰囲気は僕は思わず驚いた視線を彼に向ける。

でも考えてみたら彼も海賊の頭領だったし作戦を考えつくのも容易か。

「合流は難しいよね……なんたって今のジャンヌが竜の魔女となって知られてるし、ジル・ド・レエとの因縁も知ってる。ボクからしたらローランと会いたくない気持ちだね」

「……だとすると、ジルも私たちだけで倒さなければなりませんね」

……」

ジャンヌの言葉に僕たちは頷き、マリーが笑顔を浮かべながら彼女の手を取った。

「でも、会いたくない気持ちも分かるわ。だって女の子だもの！無理して会わなくていいに一票！ 私たちも急がなければならぬ！ね！」

「うむ……リヨンに住み着いた魔物たちを一介の兵士達が倒せるとは思わない。某たちが倒すのが一番だろう」

「小次郎さんの言う通りですね……私たちだけで倒しましょう」

「勿論さ。その為に僕たちはこの特異点に降り立った。如何なる脅威が僕たちに向かおうとも、倒さねばならない。まあみんなは安心してよ、見ての通り僕は殺しても死なない男だからね」

僕の言葉に何故かエミヤやアストルフオキゆん、ジャンヌは微妙な表情を浮かべ黒髭とアマデウス、小次郎とそれにマリーは笑顔を浮かべていた。

あれ？ 僕何かおかしい事言ったかな？

「まあ確かに……股間から魔力を暴発させてサーヴァントを打倒したり自分を矢にしろだなんて言うマスターは初めてだよ。安心したまえ、君の下には鼠一匹通させない」

「エミヤ……今ならケツ空いてるよ……？」

「要らん。つーかその雌の顔を止めろ」

「エミヤさんはやっぱりホモもいけるんですね……」

「なんでさ」

でもマシユには怒らないのは正直言っただけだと思う。

僕はケツに干将と莫耶を突っ込まれた。

<リヨン>

そんなこんなで僕たちは守り神の騎士とやらがいる街、リヨンへと辿り着く。ケツに突き刺さった二振りの双剣をどうにかして引っこ抜くとサーヴァントたちを二手に分ける事にし、正式に契約したマシユ、ジャンヌ、小次郎、黒髭、アストルフオキゆんを率いて僕は街

の東門から入ることにした。

反対側はアマデウスとマリーがリーダーとなり、いつでも彼らと連絡が取れるように予備用の通信機を清姫に持たせておく。でもきよひーって無線なくても余裕で追ってきそうだよね。

「……止まられよ、マスター。何か嫌な気配を感じる。これは……」
「呻き声……ですな」

黒髭の言葉を聞いた瞬間、僕の身体は本能的に崩壊した瓦礫の中から聞こえる呻き声の主の下へと駆けていた。積み上げられた木片やレンガを掻き分けた先には――。

「……ッ!? う、嘘だろう……? 」

「死体が動いている……リビングゲッドだね。マスター、離れて! 」
皮膚が千切れかけれ鮮血と肉が露わになるも、僕の目の前にいる死体は僕を食らおうと必死に両手を伸ばしている。正直な話、僕にも今の光景が信じられない。まさか崩壊で死んでいった市民たちをゾンビにするだなんて、変態の僕でも許せない。

アストルフオキゆんの槍に貫かれて間もなくゾンビは消滅していくが、その音を聞きつけられたのか続々と瓦礫の下から手が伸びてくる。

僕はアストルフオキゆんに手を引かれ、急いでその瓦礫群から抜け出すと僕を守るようにマシユとジャンヌが前に立った。

「……けッ。胸糞悪いことするじゃねえか。死者を冒瀆なんて事は流石に俺もやらなかったぜ」

「く、黒髭殿? 普段と口調が……」

「ああ、すまねえな。正直連中の行為にカチンときたんだ。な、マスター? 」

「……おうとも。黒髭、みんな。この人たちを眠らせてあげよう」

バツの悪い表情を浮かべながら、街の住民たちを屠っていく僕ら。聞こえこそ悪いが、今の僕には命を奪っていく重みを確かに感じている。

変態紳士は決して人の死を蔑んだりはしない。人にはセクハラするけど。

「いつもこんな雰囲気であってくれたらいいのに……ああ！ マスター！ 敵の数が減りません！」

「マリーたちに連絡しよう！ みんな、時間を稼いでくれ！」
「お任せってね！」

こんな時でも可愛いアストルフオキゆんはやっぱり僕の天使である。

股間にイチモツがついてても可愛い人間って本当にいるんだね。しばらくして僕たちとは反対側から見覚えのある魔力弾と矢がゾンビの群れに殺到し、ほとんどの敵を殲滅する。

「マスター！ 無事ですか！」

「この通りピンピンしてるよ！ エミヤ、アルトリア！ 二人は黒髭と小次郎の援護！ アマデウスとマリーはマシユの回復を優先して！ 清姫！ 宝具の準備、出来てる!?!」

「……無論ですわ。皆様の非難を優先してくださいまし」

「聞こえたね、みんな！ 僕が合図したら離脱するんだ！」

僕の隣で手にした鉄扇を構え、宝具の詠唱を始める清姫を横目にエミヤとアルトリアが未だゾンビの軍勢と交戦を繰り返す黒髭たちの下へ飛び込んでいった。

「——風王、鉄槌!!」

「ほほう、これは拙者も負けてはいられんな。屍共よ、僭越ながら拙者の剣も見て頂こうか」

一度だけ背中に背負っていた鞘に刀を納め、小次郎は中腰の姿勢でゾンビの群れへと常軌を逸する速さで駆けていく。そして、直後に鋭い金属音と共に彼は背中の刀を引き抜いていた。

「——秘剣、燕返し」

「ひゅーっ……これがかの有名な燕返しですな。拙者も漫画で読みましたぞ」

「黒髭！ キャラ！ キャラ！」

「あっ。……やるじゃねえか、あの侍」

「いやさすがに無理ありますよね!?!」

途中で気が抜けて普段のキャラに戻ってしまうのはご愛嬌。そし

て隣の清姫は僕の肩を優しく叩き、笑顔を浮かべながら頷く。

いつもこんな風にめっちゃ可愛くしてくれたら僕としては一生大切にするのに。

ただし毎日肉体関係は求めるぞ！

「これより逃げた大？付きを退治します。——転身火生三昧！」

「令呪を以て命ず……僕の下に来いッ！」

全てを覆いつくす竜型の炎に巻き込まれないよう、僕は右手を翳しながら戦闘を繰り返す。彼らに命令した。一瞬で全員が僕の頭上に現れ、僕は彼らの下敷きになる。

どうやらきよひーの道具によって周囲の敵は倒したみたいだけど、僕の顔には何故か固い感触の何かがかくつついていた。

「ま、マスター……そこ、ボクの……スカートの中だよ……」

「へ？と、という……まさかこの感触は……！」

イエス、マイサン。

この場合はアストルフオキゅんズサンか。

天にも昇る勢いで僕の意識は真っ白に燃え尽き、そして鼻の中から勢いよく熱い液体を噴出する。

間もなくして僕は意識を失ってしまった。

第十節： 俺の股間はエクスカリバー

<カルデア>

意識を失った僕はロマニとダヴィンチちゃんによつて一旦カルデアに戻され、目が覚めた僕が次に見た景色はカルデアの真っ白な天井だった。

きつとマシユ辺りが僕を部屋に運んでくれたのだろう、僕の身体は自室のベッドに寝かされている。

マシユったらああ見えてやっぱり僕の事を心配してくれているんだ。

なんてツンデレ後輩。なんて麗しき僕の後輩……。

「うーん。オルレアンのみんなは大丈夫だろうか。ひとまず誰かを呼ぼう」

僕は脳に浮かんだ……あつ、こういう時はいつも落ち着いてるエミヤを呼ぼう。

自分の脳内にエミヤの姿を浮かべ、間もなくして彼の赤い礼装が目に入った。

「……む。マスター、目が覚めたんだな。身体の方は平気か？」

「やあエミヤ。身体を心配してくれるなんてやっぱりエミヤを召喚して良かったよ。あ、ケツの穴も平気だよ」

「いやケツの穴に関しては聞いていないんだが」

またまたあ。

僕知ってるんだよ？ エミヤがクローリーンの兄貴と抱き合ったり赤髪の若い男を襲ってたり……。

でもこれ以上言及すると確実にボコられるのであえて僕は胸に仕舞っておく。

「ドクターの言伝を貰っているぞ、マスター。オルレアンのレイシフトは君が十分な休息を取れた後に再び行うらしい。君がオルレアンの特異点から出た際に、そこで時間は経過しているみたいだがジャンヌ達もどこか安全な場所で姿を隠している様だ」

「そうなのか……。正直不安だったけど、エミヤの言葉で安心できた

よ。ありがとう。ところでエミヤ、君って”投影魔術”を使ったよね？」

「ジャンヌ達がまだ無事という話を聞いて、僕はほっと胸を撫で下ろす。」

「僕の言葉にエミヤは投影魔術をやって見せてくれたようで、彼の手には小次郎が手にしている鏢のない刀が握られていた。」

「して、マスター。この投影した武器をどうするつもりだ？ 何か変な事に使うんじゃないだろうな」

「いやだなあ、僕がそんな事に使うと思う？ もしもの時の為に、自分でも戦えるようにしておきたいだけだよ」

「だが君、余裕でオルレアンの兵士を倒してなかったか？」

「核心を突かれたように僕は顔を引き攣らせる。」

「言えない……アストルフオキゆんかセイバーの武器を投影してケツに突っ込もうと思っていたなんて……！」

「そ、それは火事場の馬鹿力ってやつさ！ だから教えてよ、ね？ マスターからのお願いだよお」

「……はあ。仕方ない。悪用しない、という条件付きだぞ」

「やったあ！ さっすがエミヤ、エロゲの主人公務めただけあるね！」

「やめろ」

「そんなところで、エミヤが呆れた顔を浮かべながら僕の両腕を手取る。」

「あつ……エミヤ……なんで僕の胸はこんなにドキドキしてるの……？」

「いやだからなんで雌の顔を浮かべてるんだ？」

「べ、別にエミヤに手を取られてドキドキしてるんじゃないんだからっ！」

「心底キモイ」

「辛辣」

「仮にも僕マスターだよ？」

「そのマスターにキモイはないんじゃないかなあ、あつでも思い返し

てみればワイバーンに火を噴かれてもピンピンしてたね。

これは気持ち悪い。

「まず自分のイメージを具現化するつもりで右手に魔力を集中させるんだ。そしてそのイメージは、今まで自分が一番印象に残っているものを連想しろ」

「うーん……こうかな？」

僕の身体を通して、魔力回路が全身を駆け巡って発現していくのを感じる。

直後僕の伸ばした右手の中に、あるものが段々と形作られていく。ん？ でもこの形って……。

「……………マスター。君は……………」

エミヤが頭を抱えるのも無理はない。

段々と姿を現したそれは、ピンク色で男性器を模った振動音をかき鳴らすアレだったのだから。

「……仮にこれを投影したとして、これで戦えるかな？」

「女性になら効果があるかもしれないが……確実にやられるだろう」

「だよね……」

完全に役に立たない事は自明の理だ。

でも僕も完全に誤解な事は知ってほしい。

まさかこんなものが真っ先に投影されるだなんて思ってもみなかった。

「よし。ならセイバーの持っている剣を頭の中で想像してみる。少々宝具のレベルは高いが、練習にはもってこいのものだろう」

「わかった、やってみるよ」

エミヤに言われて、早速僕は再び右手を伸ばし始める。

青い柄に金色の鍔、そして彼女の性格を表すようなまっすぐに伸びた両刃の刀身。

数秒を時を経て僕の右手にはセイバー・アルトリアの愛用する愛剣、エクスカリバーが僕の手握られていた。

「ふむ。中々上出来だな。此れを一瞬で出来るようになれば戦闘でも使っていけるだろう」

「よし。なんだか興奮してきたぞ。呼び出して悪いんだけどエミヤ、部屋から一旦出てもらってもいい？」

「ん？ 何を……」

そう言いつつ僕は自分のズボンのベルトに手を掛ける。

即座に察したのかエミヤの手によって行く手を阻まれるが、無理やり僕はパンツ一丁の姿に早変わりした。

「やめろ!! おい!!! 聞いているのか変態!!!」

「なんだよ!! 僕だって一度異物をケツの穴に突っ込んでみたかったんだって!!」

「だからってセイバーの剣を使う事ないだろう!？」

今更になってデイ○ドが一瞬で投影できたのが分かる気がするけど、僕を邪魔するエミヤを振り払って投影したエクスカリバーをケツに突っ込もうとパンツを脱いでお尻を露わにする。

何故そんなにエミヤが必死なのか分からないが、一先ず僕の方は準備万端だ。

「マスター、お目覚めになったと聞いて——」

「あっ」

「……………えっ」

抑止力。

僕はこの時ほどこの言葉を恨んだことはない。

僕が目覚めたことを聞きつけたのであろうセイバーが部屋に入ってきて、エミヤが僕のパンツを戻そうと必死な場面を彼女は目の当たりにしてしまう。

「そ、それって……わ、私の……」

「せ、セイバー! これは違うんだ! 決して私は彼の手伝いなどしようとは……」

直後、アルトリアの姿が鎧に包まれる。

手には愛用の剣である本物のエクスカリバーを握っており、どうやら本気で怒っているようだ。

「ま、マスターとアーチャーの馬鹿アアアツ!!」

「だから誤解だつてえええ!？」

「あつ……でも……なんか気持ち良い」
「お前ほんとふざけんなよ!？」

〈黒髭の部屋〉

「おつす黒髭、遊びに来たよー」

「あつマスター、目が覚めて……ってなんでパンツ一丁に頭がアフロになってるんでござるか」

「セイバーのエクスカリバーを投影してケツに突っ込もうとしたら怒られた」

「当たり前だろお前」

さすがの黒髭でも理性は持ち合わせているらしい。

なんだよ、僕の同類かと思ったら全然そんな事ないじゃないか。

「今なにしてたの？ 一日くらい暇だし、一緒にゲームしようと思っただけけど」

「えー。拙者今プラモ作るのに忙しいでござるう。手伝ってくれるなら話は別ですけどね」

「何作ってるの？」

「美少女のやつ」

よし決めた。

僕魔改造して全裸にしちゃうぞ！

「おつ、手伝ってくれるんでござるか？ 有難いですなあ」

「ふっ……美少女が関わってるなら話は別さ。その子の胸の大きさは？」

「Dですぞ」

「部品を貸してくれ。魔改造しよう」

下衆な笑みを浮かべながら僕と黒髭は握手を交わす。

まあこういう所は本当に気が合うよね、黒髭とは。

僕は傍に置いてあったニッパーを手に取り、部品を切り離してから人間とは思えない早さで組み立てていく。

「やっぱり二人いると違うでござるなあ。作業が進む進む」

「だよね。これからエロゲのルート消化も二人で進めない？」

「それは拙者がシヨリたくなるのでNG」

「こいつ無駄に正直だな。」

あつそれは僕もそうか。

そして数十分後、黒髭が元々素材を組み立てていたのもあつてか僕らのプラモはあつという間に完成した。

プラモとかあんまり作ったことないけど結構楽しいもんだな。

「つーかマスター、こんなところで油売ってていいんでござるか？ 何やらロマニ氏が探してたでござるよ」

「という声を聞きつけて登場さ！ 久しぶりだねぐだ男くん！」

「ドクター！ 何やら隈がすごいけど……」

「徹夜続きでね！ あとマジ☆マリでネットサーフィンしてたんだ！」

何やらドクターまでも僕たちと同類な気がする。

「でもドクター、次のレイシフトは明日なはずじゃ？」

「あれ？ もう知ってたの？ てっきり僕は目が覚めたばかりかと……」

「エミヤから聞いたよ。でもエミヤは今セイバーにお説教中」

「何それ裏山でござるな」

ほんとだよね。

エミヤはやっぱり主人公の風格あるよ。

「あとマシユが探してたよ。でも逃げた方がいいかもね」

「え？ なんで？」

「セイバーさんに迷惑かけたからに決まってるでしょう！ あと見つけましたよ先輩！」

あつマイラブリーエンジェルマシユなんだ。

でも彼女は私服姿ではなく甲冑を身に纏っているあたり、僕の事を本気で怒る気にいるらしい。

「落ち着いてくれ、マシユ。僕がデ○ルドを真っ先に投影したのとセイバーの剣をケツに突っ込もうとしたの謝るから許してほしい」

「そんな事してたんですか!? 通りでセイバーさんが殺意の波動纏ってた訳ですよ！」

「あとエクスカリバー撃った時にちよつとセイバーの胸触った。板
だった」

その後、僕が二度目のエクスカリバーを食らったのは言うまでもな
い。

黒髭と僕の努力の結晶の吹き飛んでしまった。

第十一節： 深夜ポテチと深夜ラーメンは肥満の基

<カルデア・ぐだ男の部屋>

一騒動起こった後、僕はマッシュとロマンからのお説教を経てベッドに横たわっていた。

明日のオルレアンへのレイシフトに備えて今日は早めに寝ておこうという僕の考えにより、全身の倦怠感と共に寝息を立てている。

しかし急に催したのかベッドから立ち上がり、股間に走る尿意を感じながら寝間着姿のままトイレへと走った。

僕の部屋に生憎トイレは備え付けられておらず、カルデアの共用トイレで用を足すしかない。

「あ〜……」

なんとも気だるい声を出しながら僕は用を済まし、濡れた手をタオルで拭う。

再び寝直そうと思い欠伸を掻きながら自分の部屋に辿り着くと、僕はポケットに手をつ突っ込んだ。

「……ん？」

各サーヴァントや職員にあてがわれた部屋はカードキーによってロックされている。

なので必然的に再び部屋に入り直すのにはカギが必要だ。

「……ない」

しかし、目当てのカードキーはどこにもない。

トイレに落とされたのかと思って戻ってみるも、白いカードキーはどこにも見当たらなかった。

これもしかなくても詰んでるんじゃないか？

「やつべえ……寝ぼけててカードキー忘れたみたいだ……」

不幸な事に現在深夜0時。

セキュリティ担当の職員さんも寝ている時間だろうし、サーヴァントたちも各々の行動を取っている。

おそらくほとんどの人間が眠りについていてであろうこの時間帯に、僕は最悪の事態に陥ってしまったわけだ。

仕方ない、いったん黒髭の部屋にでも向かおう。
きつと彼も起きてゲームとか何やらしているはずだ。

「おーい、黒髭？ 今いるー？」

僕は黒髭の部屋の前に立ち、白いオートロック式のドアを何回かノックする。

瞬間、目に隈を作りながら血走った目で僕を見つめる彼が現れた。

「……なんでござるか、マスター」

「インキーしたから部屋に入れてほしい。できれば朝まで」

「……非常に申し訳ないんだけど、拙者同人誌描くの徹夜続きで死にそうでござる。割と本気で座に帰るの考えてしまった」

こんな真つ白な黒髭見たことない。

さすがに可哀そうなので僕は彼に謝罪の言葉を送ってから立ち去り、再びカルデアの暗い廊下を歩き始めた。

僕が次に向かったのはロマニの医療室。

「ロマン、今入ってもいいかい？ インキーしたからちよつと助けてほしい」

「マギ☆マリと徹夜続きで死にそうだから無理、ごめん」

次に僕はマシユの部屋へ。

「マシユ、君の部屋に入れてほしい。インキーしちゃった」

「そう言って私に変なことするつもりですよね。エロ同人みたいに」

そう言われるのも無理はない。

というかマシユのパジャマ姿可愛かったな。

上下ピンクとか普通に発情しそうだったよ。

マシユにも断られ、次に僕は小次郎の部屋へと足を進めた。

「——ああ、主殿オ？ 今くーふーりん殿と酒盛りしてるでござるう」

「ボウズウ、こっちきて俺の酒注いでくれえ」

僕は無言で立ち去る。

思わず絶望に打ちひしがれ、廊下で両ひぎを着いた。

「やべえエエエ!! どいつもこいつも役に立たねエエエ!! いやインキーしたのは僕のせいだけだ!! 明日オールで言ったら絶対ボコボコにされちゃうううう!!!」

「うるせえ!!!」

そりや寝ている最中に大声でツツコんだら怒られるのも当然である。

でも叫びたくもなるよね。

今ならアメリカ横断編のミ〇ターの気持ちができる。

「……おや。マスターか、どうかしたのか？」

「あ、どうもこんばんは。ひどく悩んでおられるがどうかしたのですか？」

「せ、セイバーにエミヤ！ 助けてくれ！ 君たちが最後の希望なんだ！」

<カルデア>

「つまり、トイレに行った時に鍵を忘れて部屋から閉め出されてしまった訳か。なるほど」

「それは困りましたね……その様子ですと他の方にも断られたみたいですし……」

「うん。ほんと絶望で絶頂に達しそうだったよ」

「DMにも程があるだろお前」

訳を話している間に僕たちは元の部屋の前に辿り着く。

暗い照明が二人を照らしている光景は、何故か死ぬほど見たことのある光景だった。

「マスター、私にいい考えがあります。少し離れててください」

「ん？ 何を……」

えっへんと言わんばかりのドヤ顔でセイバーは鎧を見に纏い始め、手に伝説の聖剣エクスカリバーを発現させる。

あれ、なんだか嫌な予感。

「エクスカリ——」

「おiiiiiiii!! 止めろおおおお!! ここ一带吹き飛ばすつもり!?! つか僕ごと消そうとしてなかった!?!」

「……ちっ。バレたか」

「何舌打ちしてんだテメー！ たかがケツにエクスカリバー突っ込も

うとただけだろ！ まだ恨んでんのか！」

「いやそれ怒って当然ですからね!？」

まあ恨まれるのも当然である。

次にエミヤが僕らの前に立ち、ドアの前に右手を翳した。

「おお！ もしかして投影魔術でカードキーを出そうって言うんだね！ さすがエミヤ！ どこぞはらぺこあおむしとは違うね！」

「誰がはらぺこあおむしですか！ほんとシバきますよ！」

「でも食っても食ってもその発育には……」

「テメーぶつ殺されてえか」

セイバーが普段の口調を忘れて胸倉を掴んだ辺りでエミヤの投影は終わったようである。

僕セイバーも可愛いと思うんだ、特に私服の黒タイツが死ぬほどエロい。

だが次に僕が見たのは白い長方形の塊が部屋のドアに設置されている光景。

何やら嫌な予感がする。

「マスター、これでどうだ？」

「えっこれ何？ すごい物騒な匂いするんだけど」

「C4爆弾だ」

「丸ごと爆破してどうするつもりだテメエ！ しかも丸眼鏡掛けて言うんじゃねえよ！ どこぞの爆弾魔か！」

ツツコミってこんなに大変なんだと僕は痛感する。

改めてマシユやきよひーの偉大さがわかったよ。

「だいたいなんでそんな奇行に走ってるの二人とも！ 深夜テンションでアホになったの!？」

「あわよくばマスターに復讐をと思ってな」

「こんなところであわよくばなんて思うんじゃねえよ！ 僕生身の人間！ 君らと違って蘇生不可！」

「ただのうんこ製造機では？」

「その顔でうんこって言っちゃダメ！ 色んなところから怒られる！」

閑話休題。

僕らには何も手立てがない事に気づいたのか、三人で廊下の端っこで体育座りをして落ち込んでいる。

「……………どうしよう……………」

「C4も宝具も撃てないじゃどうしようもないな……………」

「もう床で寝ればいいんじゃないですかね？ マスターなら大丈夫ですって。私たちは個々のベッドで寝ますから（笑）」

「（笑）じゃねーよ！ 何満面の笑みで立ち去ろうとしてんだテメーら！ 関わったのオメーらだからな！ もう寝るとは言わせねーぞ！」

「嫌です。あつ別に私はシロウと寝るという意味で言った訳では……………」

「せ、セイバー……………」

何こいつら。

深夜だとみんなアホになる病気でもかかったの？

二人とも何顔赤くしてんだよ。

当てつけか？ 僕への当てつけなのか？

「あれ？ マスター？ こんな夜遅くにどうしたの？」

「あ、アストルフオキyunん！ ああ……………今は君が女神に見える……………」

「わっ、くすぐったいよお〜」

同じ男とは思えないほどアストルフオキyunんの肌は柔らかい。

マジでこのままお持ち帰りしたいくらいである。

「アストルフオキyunん……………僕は今非常に困っているんだ……………。どれくらい困っているかって言うとエロサイトに架空請求された中学生時代のように……………」

「割と深刻なんだね……………分かった！ ボクに任せて！」

「あ、アストルフオ！ 何か打開策があるとでも言うのか！ 私たちでも解決できなかった代物だぞ！」

「うるせー脳筋バカツプル！ これから僕はアストルフオキyunんと深夜ランデブーすんだよお！」

何を思ったかアストルフオキyunんは僕の胸の中から離れ、カード

キーをかざす部分へと近づく。

「オラアッ!!!」

普段の可愛いアストルフオキゅんとは思えないほどの野太い声。何故か画風も変わっているのが妙に気になるが、彼の拳はカードキーの部分を易々と貫いた。

そして、嫌な音を立てながら僕の部屋のドアは開く。

「ほら、開いたよ？ マスター、明日遅刻しちゃダメだからね」
沈黙。

そんな僕らを無視して悠悠自適に立ち去っていくアストルフオキゅんを一瞥し、僕は部屋へと入る。

「……………あの、これからお茶会でもしない？」

「出来るかアッ!!!」

第十二節： 覗きは男の勲章

<オルレアン>

「うーんこの感覚は間違いなくオルレアン」

「なんででしょう……先輩の頭が地面に突き刺さっているのが普通の光景に見えてきました」

「見慣れちゃダメだからな嬢ちゃん。嬢ちゃんだけは最後の砦であつてくれよな」

この風、この匂いこそオルレアン。

やけに土臭いのが妙だが、僕は地面に突き刺さった頭を引き抜く。

「それで、ここはどこなんだ？ 水の音が聞こえるから多分川の近くだと思うんだけど」

「おっ！ その黒い髪と白い服は！ ぐだ男！ ぐだ男かい!?」

「やあアマデウス。久しぶりだね。とりあえず状況を教えてほしい」

やけにテンションの高いアマデウスといきなり鉢合わせた僕たちは人通りの少ない河辺へと向かった。

そこにあつたのは綺麗に折り畳まれた二つの女性ものの服と純白の白い下着。

それとマリーのクラゲみたいな帽子も置かれている。

一瞬で僕の脳内は回転し僕は川辺へ向かおうと足を進めようとした瞬間、背後にいたセイバーに首根っこを掴まれた。

「どうするおつもりですかあ……マスターあ……?」

「い、いや?別に覗きに行こうだなんて思っていないよ? 決してそんな欲望にまみれたことなんてそんな……」

「その双眼鏡で目論みバレバレなんですけど!? ジャンヌとマリーさんの水浴び覗く気満々ですよね!?」

まずい。

欲望が言動よりも先に出てしまっていたようだ。

唯一の常識人に加えてマッシュでさえも僕へ向けて盾の穂先を構えている。

しかし。

状況は思っていたよりも好転した。

「うマスターあー!!　ここは拙者に任せて先にいくでござるうーツ!!

」
「く、黒髭……!?!?　」

「黒髭殿!?!　何をするんですか?!　マスターを止めようと……!　」

「黙らっしやい!!　男が腹を括ったときに止めるとは何事ですかあーっ!!　」

「いやクツソ汚い覚悟ですけど!?　欲望に走ってるだけですけど!?　」

く、黒髭……!　　僕はこの時ほど僕は君を召喚して良かったと思うときはない……!　

黒髭がセイバーを止めている間に、僕は川辺に向かって駆けていく。

なんだか背後で彼が座に還る音が聞こえたが、黒髭の心意気を買って敢えて振り向かず、近くの茂みに辿り着いた。

「ぐふふふふ……。まさかあの美少女二人の水浴びしている光景を拝めるとは……!　」

「いやあやっぱり英霊として召喚されてみるものだね。美少女の裸体見られるんだから!　」

「えっ君も来るのアマデウス?　僕一人で楽しもうと思ってたんだけど?　邪魔しないでくれる?　」

「何言ってるんだテメー!　独り占めなんて許さないぞお!　紳士は楽しみを共有してこそ紳士だろうが!　」

「その一言が既に紳士じゃねえよ!　」
その瞬間、茂みに隠れた僕らの背後に殺気が走る。

恐る恐る振り向くとそこには布を身体に巻いたジャンヌとマリイが立っていた。

「へえ……久しぶりにこっちに来たと思ってたら覗きなんてしてたんですか……!　」

「許せないわよねえ……ジャンヌ……!　」

「ひいひい!　僕は関係ないよ!　こっちのぐだ男が僕を無理やり引

き込んだんだ！」

「おいイイイイ!! 僕を売るなアアア!! お前もノリノリだったじゃねえかアアア！」

即座に仲間を売るアマデウスに僕は怒りを露わにする。

同じ変態仲間としてあるまじき行為、これは許されたことじゃない。

まあ二人にボコボコにされてから追及することになるんだけど。

「誰の帽子がクラゲみてえじゃコラアアア!!!」

「いやそこオオ?!」

――――
〈オルレアン・町〉

マリーとジャンヌに前が見えなくなるまでボコボコにされた僕とアマデウスは、同じように打ちのめされた黒髭と合流して今に至る。

以前レイシフトしたときはこの町の住民がゾンビに変えられたのだが、今の様子は誰一人としていない閑静なものだった。

「まさかバレるとはね……前回ではツツコミ役に回って許されると思っていたのに」

「何が許されるんですか。先輩の罪は原罪に匹敵しますよ」

「重すぎない？ 僕の重ねてきた罪重すぎじゃない？」

まさか僕が人類悪になつていたとは。

もう切腹したりしたら済む話じゃないのこれ？

「……ん？ なんだあれ？ 瓦礫の上で黒い服の男が体育座りしてんだけど」

「えっ何あの人？ 顔の片側だけ仮面被つてんだけど……」

僕はゆっくりとその男に近づく。

何やら目に涙を浮かべながら僕を見上げた。

「……ラララ。待望の敵が現れた。私は嬉しい」

「いやどう考えても待っててくれたんだよね!! 本当にごめんね!? 今まで変な行動しかしてなかったからね!」

思わず僕も彼に頭を下げ、彼に手を差し伸べる。

彼は浮かべた涙を腕で拭い、男は僕らの前に立ちはだかった。

「……君らがあの……人類最後のマスターかな。君の思いやりには助けられた」

「いや”前々からスタンバってました”なんて顔されたら誰だつてそうなるよ」

「……いやそんなことはない。別に時間軸とか関係ないし」

「ちよつとマスター!! またあの人涙目になつてるじゃないですか！」

「僕のせい!?!」

そんな事をマシユと話していると、目の前の彼はゆっくりと立ち上がる。

両手に嵌めた長い鉄爪が血に濡れていることを確認すると、マシユが僕を守るように立ちはだかった。

「さあ始めよう。私の……悲劇を」

第十三節：造形は美少女フィギュア

<フランス>

仮面の男が周囲に召喚した黒いサーヴァントを携え、僕らの前に立ちただかる。

ただでさえ不気味な姿だというのに、黒い影が彼の周りにあるせいで余計に恐ろしさを際立たせた。

「こ、こいつは……！」

「クーフリーンさん！ 術式の展開を！ 彼らはアサシンクラスの敵です！」

「おう分かった！ 坊主、身構え——」

隊列の真ん中に立ったクーフリーンが、手にした杖を構えながら背後の僕に視線を向ける。

「……えっ」

「僕は坊主なんかじゃない。シンシ・ド・ヘンタイという女の子の心を盗んでいく怪盗さ」

黒いブーメランパンツに肩に掛かった黒いマント、そして顔に装着した蝶型の仮面。

ゴキゲンな蝶になって煌く風に乗ろうとした結果がこれである。

対峙した彼は驚きの表情を浮かべながら僕へ右手を向け、震えながら口を開いた。

「ま、まさか君は……あの、伝説の……？」

「そうだとも。僕……否、私は世界中の紳士の味方だ。無論……君もね。ファントム・ジ・オペラ」

「……………」

「えっこのノリで真名分かったの？ お前らの頭の中どうなってんの？」

アマデウスの疑問は尤もだ。

マリーやジャンヌの視線が既に汚物を見るような視線に変わっているが、僕は気にしない。

なんたつて僕は今謎の紳士、シンシ・ド・ヘンタイなんだからね！
「シンシ・ド・ヘンタイの名の下に命ずる！クーフリーン！あの迷える子羊を救いたまえ！」

「うるせえ燃えろ変態」

「あああああ!! ケツに!! ケツに火がアアアア!!」

地面を転がりながら臀部に点いた火を消す。

敵側のフロントムでさえも哀れみを抱いた視線を僕に向け、まる焦げになったケツを抑えながら僕は立ち上がった。

「……往け。我が僕たちよ」

「ちよつと！先輩のせいで先制されたじゃないですか！」

「だから今の僕はシンシ・ド——痛い痛い！殴らないで！謝るから！ 変なノリで真名バラしちゃったの謝るから！」

僕にだけ攻撃が集中するのが納得できないが、一通りフルボッコにされた後で僕は再び彼らへ視線を向ける。

「あの仮面の変態をぶっ殺せエエエ!!」

「無理矢理過ぎないですか!?!」

「うるせえ！せつかくの僕の晴れ舞台を汚すとは許さんぞフロントム！」

「完全な逆ギレだよ！最早尊厳投げ捨てちゃったよ！」

使役したエミヤ、クーフリーン、アルトリアを立ちはだかるフロントムへ向けて突撃させると、反撃として彼のシャドウサーヴァントが一斉に飛び掛かってきた。

「アーチャー！セイバー！時間を稼いでくれ！」

「御意！」

「まさか君に命令される日が来るとはな」

そんな事をぼやきながらも二人は見事なコンビネーションで迫り来るシャドウサーヴァントの攻撃を捌き、クーフリーンの下へ敵を近づけさせない。

「いigo三人とも！僕がボコボコにされている内にやっつけるんだ！」

「いや先輩酷い顔になってますよ!?!」

「まさかフロントムに殴られるとは思わなかった」
所謂”前が見えねエ”状態である。

恒例となったこの顔面はさて置き、マシユが僕を守ろうと盾を構えた。

今これはチャンスなのでは……？

僕はおそろおそろ手を伸ばし、攻撃を耐え忍ぶマシユのそのマシユマロを手にししようと両手をワキワキさせる。

「いや何やってんですか貴方」

「貴方じゃない、シンシ・ド・ヘンタイ——」

「んなこと聞いてねえよ！ 状況考えろ馬鹿！」

ジャンヌとマリーからの全力の阻止。

まさかあのクラゲみたいな帽子で殴られるとは思わなかった。
ていうかそれ武器にもなるんだね。

「準備できたぞお前ら！ 行くぞ、ウィツカー——」

「そこで僕が合体イイイイ!!」

兄貴の周りに展開した赤い魔法陣の中へ、僕は無我夢中で飛び込んでいく。

ルーンによって形成された木製の巨人の内部へ僕の身体は取り込まれ、まるで某機動武闘伝のような雰囲気僕と一体化した。

「なっ……！」

「行くぞウィツカーマン！ 僕の声に応えろ！」

「おイイイイ!! そんな風に設計したつもりはねえぞオオオ!!」

クーフリーンの兄貴が怒るのも無理はない。

何せ僕と同化したウィツカーマンの股間部分が異様に突き出ており、赤い鬨気というよりは白いオーラを纏っている。

「うわー……」

「そういう人だったのですね、ランサー……」

「いや違エよ！ どう考えてもあの坊主のせいだろ！」

「男にこの宝具……やはり兄貴はホモ」

「ぶち殺すぞテメエ!!」

心の底からの怒号を無視し、僕の身体が動くたびにウィツカーマン

は一步、また一步と歩みを進めた。

そうしてファントムの元へ辿り着いた瞬間、僕は全身に力を込める。

「出るオオオ!!」

「構えるのそっち!? 確実に弱点晒してるよね!? とういか絵面的にアウトだよね!?!」

紳士に絵面を気にしている余裕はない。

伸びきった股間部分を振り下ろすようにウィツカーマンは倒れ、ファントムを巻き込むようにして砂埃が舞った。

それと同時に、ウィツカーマンは解除される。

「ぐっ……まさか……私が……!」

「……ファントム……。君が負けたのはたった一つの簡単な理由だ。君は……愛を知らなかったんだ」

「フッフ……そうか……。手土産とは言えないが、君たちにある贈り物を送っておいた……」

霊基が消えかかっているファントムは、微笑みながら僕へ手を伸ばした。

「あと……股間の毛の処理……忘れてるよ……」

「えっ嘘? マジで?」

「嘘だ」

「おいテメェ」

不敵な笑みを浮かべながら彼は消滅する。

補足すると僕はまた全裸になったわけだが、ファントムは嫌な顔一つせずに消えていった。

実を言うと彼は良い人なのかもしれない。

その瞬間、僕の耳に付けられていた無線が起動する。

『特大な霊基反応があるぞ! これは……!?! う、嘘だろ!?!』

「どうしたんだロマン! 全裸の美女でもいたのかい!?!」

『全裸は君だけだよ! ワイバーンじゃない……正真正銘のドラゴンだ!』

この場にいる全員がロマンの言葉に顔を強張らせた。

逃げ道を探そうと彼らは周囲を見渡すが、不幸にも既に崩壊している町に隠れ場所などない。

「これが……ドラゴン……!?!」

緑色の鱗に全身を包まれた、巨大な爬虫類。

まるで獲物を見つけたことに関して笑みを浮かべるようにドラゴンは舌をなめずり、僕は全裸のまま巨大なトカゲと対峙する。

「ドラゴンといえばアメリカだと一つの性癖として理解されてるよね」

「今その話要る!?!」

第十四節： 自立飛行物体グダオ

<フランス>

「すごいドラゴンだ見て見てマシユ！ マジで火吐いてくる！」
「言ってる場合ですか先輩！ すでにアフロになっててひどい状態ですよ！」

「全裸になってない辺りまだ温情あるよあの子」

最近になってエネミーの気持ち汲み取れるようになってきた。

目の前の馬鹿でかいドラゴンは相変わらず僕たちに殺意を向けるんだけど、まあそこはモンスターなので仕方ない。

「と、とにかく走って！ このままじゃ私達全員やられてしまいます！」

「自立飛行人型物体グダオにトランスフォームしたら逃げられるかもね」

「あ、やっぱこのままドラゴンに燃やされた方が良いかもしれせん」

どんだけ僕のチン○プターが嫌なんだろうジャンヌは。

ドラゴンに負ける僕のマイサンが可哀そうでしょうがない。

そんな時、宝具を展開したマリーとアストルフオくんが僕らの隣を滑空する。

「ジャンヌ！ 皆さん！ こちらへ乗って！」

「こっちも空いてるよ！ ヒポグリフなら3人いけるはず！」

まるで椅子取りゲームのようにマシユとジャンヌ、それにアルトリアと清姫が二人の宝具の背中へと乗った。

小次郎とエミヤは既に霊体化し、クーフリーンの兄貴は自身のルーンを使用して姿を潜める。

地上に取り残されたのは僕と黒髭、それにアマデウス。

「なんか予想はしてたけどやっぱ残されたね……」

「落ち着いている場合でござるかマスターアーツ!? 今にもトカゲモドキが迫ってきてますぞオ!？」

「むむっ！ ここは一つ、僕の音楽を聞かせようじゃないか！」

「さ、流石天才音楽家のモーツァルトなだけある……でもここにや楽

器なんてないですぞー！」

「いや、まだケツがあるッ！ 僕のドラムを聞けえエエい!!」

「み、妙につるつるなのが腹立つ……」

「いやそこオ!? 早くズボン穿きなさいこのアホ！」

妙に優しい黒髭に抱えられながら僕らは必死に迫り来る巨大トカゲから離れようと逃げ惑う。

そこで妙案を思いついた僕はさっそく黒タイツの中に仕舞っていたスケッチブックを取り出して絵を描き始めた。

「こんな状況で何してるんですかマスター！ そんな元気あるなら走ってちよー！」

「いやあでも人間うんこしたい時ほど神経張り巡らされるって言うじゃん。それと一緒だよ」

「あ、それ分かるかも。僕は結果的に漏らしたけど」
「きったねえな天才」

吐かれた炎を間一髪で避ける黒髭に、出来上がった絵を見せる。

「どう黒髭？ 題して穴があつたら入りたい作戦」

「拙者桃白白が投げた柱みたいになってない？ ってかアマデウス氏どうすんの？」

「……悪いアマデウス、この作戦一人用なんだ☆」

「ぶっ殺すぞデメエ」

器用にもアマデウスは黒髭に抱えられたまま僕の胸倉を掴んだ。

このセリフをまさか使うときが来るとは思わなかったけど出来ればアマデウス自身に言っただけよかった、声的に。

「マジでどうすんのマスター!? このままじゃ全員バーベキューですぞー！」

「仕方ない、やはり僕がトランスフォームして竜殺しとやらの騎士様を見つけようじゃないか。幸い僕の飛行形態は二人まで載せられるよ」

「ほんと何者なお前」

「変態です」

閑話休題。

一先ず僕は変形して二人を乗せ、なんとかドラゴンの魔の手から逃げ延びる。

その時、ドクターとダヴィンチちゃんからの通信が入り、僕は片手間に無線を起動した。

『大丈夫かぐだ……うわあクツソ汚いもの見ちゃったよレオナルド』
『私はもう慣れてきたよ。とにかくあのトカゲから逃げ延びたようだね』

無理もない。

今の僕は全身にモザイクを掛けられても普通に貫通するレベルの汚さだ。

まだ黒タイツがあるおかげでなんとか難を逃れているが、全裸だったら普通に放送事故レベルだ。

「それで竜殺しの騎士っていうのはどこにいるの？ この状態あと数時間しか持たないよ」

『いや数時間も持つのそれ？ まあいいや、そこから北へ数キロ行くと騎士様が拠点にしてお城がある筈だ。ひどい手傷を負っているようだから、なんとか治療してあげてね』

「合点承知の助！ この特異点は僕に任せてくれて大丈夫だよダヴィンチちゃん！ 帰ったら胸揉ませてね」

『中身おっさんだけどいいの？』
いけるいける。

某騎空団の錬金術師もおっさんだったし。

そんなこんなで通信を済ませ、散り散りになった他のメンバーにも騎士が居るといふ座標を伝える。

なお僕の今の姿は筒抜けのようで、返答がすごく曖昧なものになっていたのは気にしなきゃいけない。

「とりあえずここからは一時間近く掛かるみたいだね。その間に何する？」

「猥談しようよ猥談」

「よっしゃそれで行こう。まず今のメンバーで一番シコれるの誰だと思おう？」

「拙者マリー氏」

「あつくそう先に言われた！　じゃあ僕ジャンヌ」

「僕は清姫」

我ながら会話がひどい。

こんなの聞かれたら絶対にボコボコにされる。

ジャンヌ筋力めっちゃあるし。

「意外と敵側の方にもいい子いるよね。僕あのカーミラさんとかす
き」

「あ、わかる。意外と乙女趣味なところありそう」

「ギャップ萌えつてやつ？　いいよねえ、マリーがああ見えてヘビメ
タめっちゃ好きだったら惚れてた」

思春期かお前らと言われても過言ではない。

しかし突然、マシユからの通信が入り慌てて僕は会話を遮断する。

『……先輩、何話してるんですか？』

「ん？　今いるメンバーで誰が一番かわいいか話してた」

『先輩は誰だと思えます？』

「もちろん清姫ちゃんでしょ」

『は？』

「すいません、マシユが一番です。そのマシユマロ食べたい」

そう言う事言ってるんじゃないか、と言いかけて彼女は突然顔を赤らめ
る。

え、何？

どう考えてもそういうノリじゃないよね今の？

先輩最低ですと言いつつ残して彼女は通信を切る。

「うわあぐだお今のはやっちゃったねえ。折角の卒業チャンス逃し
ちやったよ」

「ウツソだろお前……。俺青姦でもイけるのに……」

「そういうとこですぞマスター。ん？　あれじゃないですかね、お
城って言うのは」

黒髭の言葉通りに僕たちはようやく騎士のいる城へと辿り着いた
様だ。

誰もいない辺り、おそらく僕らが一番乗りというのだろう。

さつそく僕は飛行形態のまま城へと乗り込む。

中はすさまじい事になっており、あちこちが崩壊してたり瓦礫にまみれたりしている。

そんな中、瓦礫に寄り掛かりながら荒い呼吸を整えている銀髪の男が地面に座り込んでいた。

恐らく彼が竜殺しの騎士とやらだろう。

僕は彼に声を掛ける。

「やあそこの騎士さん、少し手を貸して——」

「うわああああああああ!!! 化け物おおおお!!!」

まあ今更だけどそう思われても仕方ないよね。

僕たちは騎士が放った宝具により消し飛んだ。

第15節： 個人的には悪魔っ娘が好き

<騎士の根城>

「ねえどうしてくれるの騎士様。僕はまだしも黒髭とアマデウスも股間以外隠れてない状態になっちゃったじゃん」

「す、すまない……まさかこの地に降り立ったマスターだとは……」

「まあまあ。少なくともエネミーと見間違えるのは仕方ないでござるよ。普通に考えて人間ヘリコプターとか頭おかしいですぞ」

負傷しているのにも関わらず、目の前のイケメン騎士は申し訳なさそうな表情を浮かべながら正座をしている。

出会い頭にバルムンクはひどいと思うんだ、ラブコメのヒロインでもそんな事しないよ普通。

「ともかくマリアたちには無事に彼と合流出来た事は伝えておいたよ。あとは僕たちの服を探さなきゃね」

「そういえばここに赤タイツと青タイツだけはあるのだが」

「モジモジ君かよ」

「すまない。でもこれしかないんだ」

大人しく赤青のタイツを身に纏うアマデウスと黒髭。

黒髭に至っては妙に筋肉質なせいかな普通にボディビルやってる人に見える。

「先輩！ 無事ですか……ってうわぁ……」

「待ってくだちいマシユ氏。これ誤解だから。決してマスターにシンパシー感じたとかじゃないから」

「アマデウス、その着心地は如何なものかしら？」

「めっちゃ良いよ。マリアも着てみる？」

ナイスアシストアマデウス。

マリー様のタイツ姿とか純粹に興奮する。

何故か兄貴やエミヤでさえも親指を立てて満面の笑みを浮かべていた。

「君たちが……そうか。彼らの仲間という訳か」

「不本意ながらですけどね。とにかく、今は時間が無いんです。竜殺

しの騎士というのは貴方の事ですね？」

「如何にも。傷は既に君たちのマスターに治してもらっている」
「なら急いでください。すぐそこに、私達を追う竜種が近づいてきているのです」

何、と騎士が顔をしかめながら剣を手に取り立ち上がった瞬間。
聞き覚えのある咆哮と瓦礫の崩れる音が響き渡り、僕たちの身体を硬直させる。

「……なるほど。召喚されたのはこの為か……」

轟音の聞こえた元へ向かうとそこには相変わらずドラゴンは健在で、僕たちを見つけ出したのか更に元気になってる気がした。

こんな熱いラブコールをくれるならせめて擬人化してくれ。

「おや、ここにいましたか。見つけましたよ、私」

「あつクラスに一人はいるツンデレキャラポジの女の子だ！」

「誰がツンデレよ！　べ、別にあんた達を見つけたかったわけじゃないんだからね！　ただ聖杯で願いをかなえる為なんだから！」

何あの子めつちやノリいいじゃん。

ドラゴンを連れて僕たちの前に現れた黒いジャンヌは咳ばらいをしながら旗を掲げた。

「……瀕死のサーヴァントが数人、フン。これじゃあ肩慣らしにもならないわね」

「やべえぞマスター！　あのトカゲモドキ、また火を吐いてきやがる！」

「私がやります！　先輩、下がって！」

マシユとクーフーリン、それにジャンヌが僕の前に立ちほだかり、各々の宝具を展開する。

しかし奴の吐く炎は3人の魔力を以てしても到底守り切れるものではなく、勢いが更に増していた。

『うわっ!?　なんだこのエネルギー反応……!!』

「くそっ！　もう持たねえぞ！　おい竜殺しとやら！　準備できてんのか!?!」

「——無論。君達のおかげで、随分と回復できた」

降り注ぐ火の粉を払いながらイケメン騎士がドラゴンの前へと躍り出る。

「ふ、ファフニールが怯えている……？ まさか！」

「二度姿を現すのなら、この俺が二度この手で打ち倒すまで！ 蒼天の空に聞け！ 我が名はジークフリート！ 汝を嘗て打ち滅ぼした者だ！」

そう意気込むと騎士——ジークフリートは手にした剣を天高く掲げた。

辺りに風が立ち込み始め、その風に雷が纏っていく。

「宝具解放！ 幻想大剣 天魔失墜ッ！！」

風を纏ったその剣から放たれる、必殺の一撃。

その攻撃を羽に食らったのか、ファフニールは情けない声を上げながら僕らの前から去って行く。

「はあ……はあ……。ひとまず、これで……」

「ジークフリート！」

宝具を展開した瞬間に彼は倒れ、ジャンヌとマリーによって回復魔法を施される。

霊基はまだ消滅していない、おそらく病み上がりなせいで気を失ってしまったのだろう。

「ジャンヌ、マリー。今は応急処置だけ済ませて安全な場所へ撤退しよう。幸いボクのヒポグリフならジークフリートを乗せられるよ」

「お願いします、アストルフォ。クーフリーンさん、彼に付いて行ってあげてください」

「おう、分かった。坊主たちの事は任せませ」

そう言いながらアストルフォくんは大きな鷲の魔物を召喚し、気を失っているジークフリートの身体を乗せた。

鷲の背中に彼は跨ると、クーフリーンの兄貴も同じようにして彼の後ろに乗る。

「……む」

「気づきましたか、アーチャー。まだまだ我々を追うサーヴァントたちがいるようです。マスター、どうされますか」

